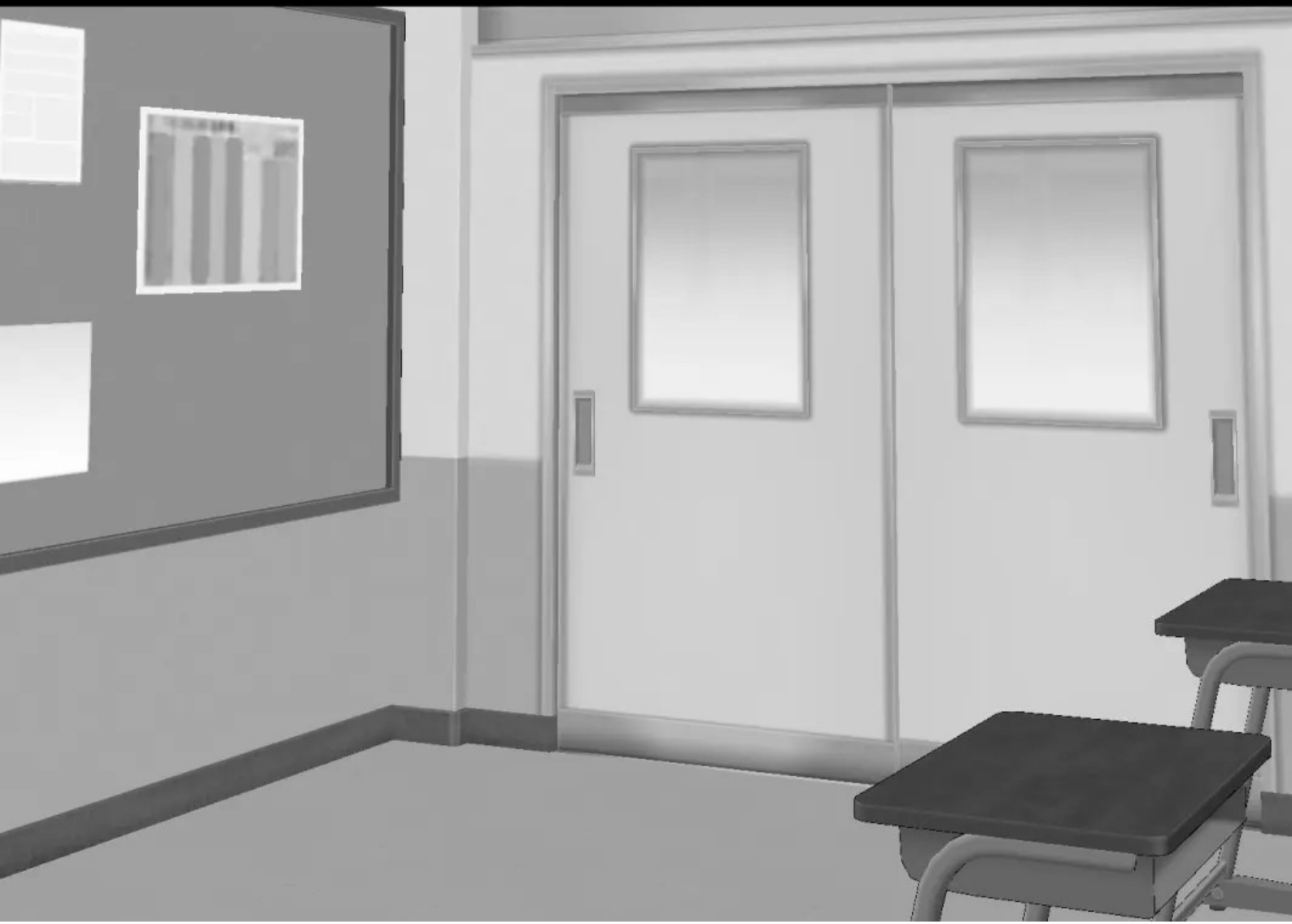

大人をナメてたら
さっさと寝取られた幼馴染
～ギャルチョロイン～

俺には幼馴染がいる。

家も隣同士で小さいころからずっと一緒だった女の子、倉原摩夜（くらはらまや）。

当たり前のように地元の同じ学校に進学し、当たり前のように毎朝一緒に登校する。



そんな関係は年頃の男女からすればからかいの的であり、クラスメートにはよく茶化されたりする。

しかし、悪い気はしなかった。

摩夜は幼馴染から贔屓目に見ても美人だと思う。学年でもかなり可愛い方だろう。

摩夜「冬馬ー、今日は友達と寄り道してくから一緒に帰れんよ～スマン」

冬馬「べ、別に一々言わなくてもいいって、幼馴染だからって四六時中一緒な訳じゃないんだし」



摩夜「えー？冬馬寂しがるぅじゃーんｗｗ」

女子集団「(笑)」

冬馬「…」

クラス男子A「いいなー摩夜ちゃんと幼馴染とか」

クラス男子B「さっさと付き合えよ！幼馴染で止まってんのが逆に腹立つわクソが！」

男子A「ｗｗｗ」

冬馬「ははは…ｗ」



摩夜はクラスでも目立つ存在だった。
頭もいいし運動もできる。
誰とでも気兼ねなく話すので女子グループの中心にいた。

ただ、飄々とし過ぎている部分もあるというか教師に対しても物怖じせず意見するため、そこばかりはある程度見直すべきだと幼馴染視点でも感じる。

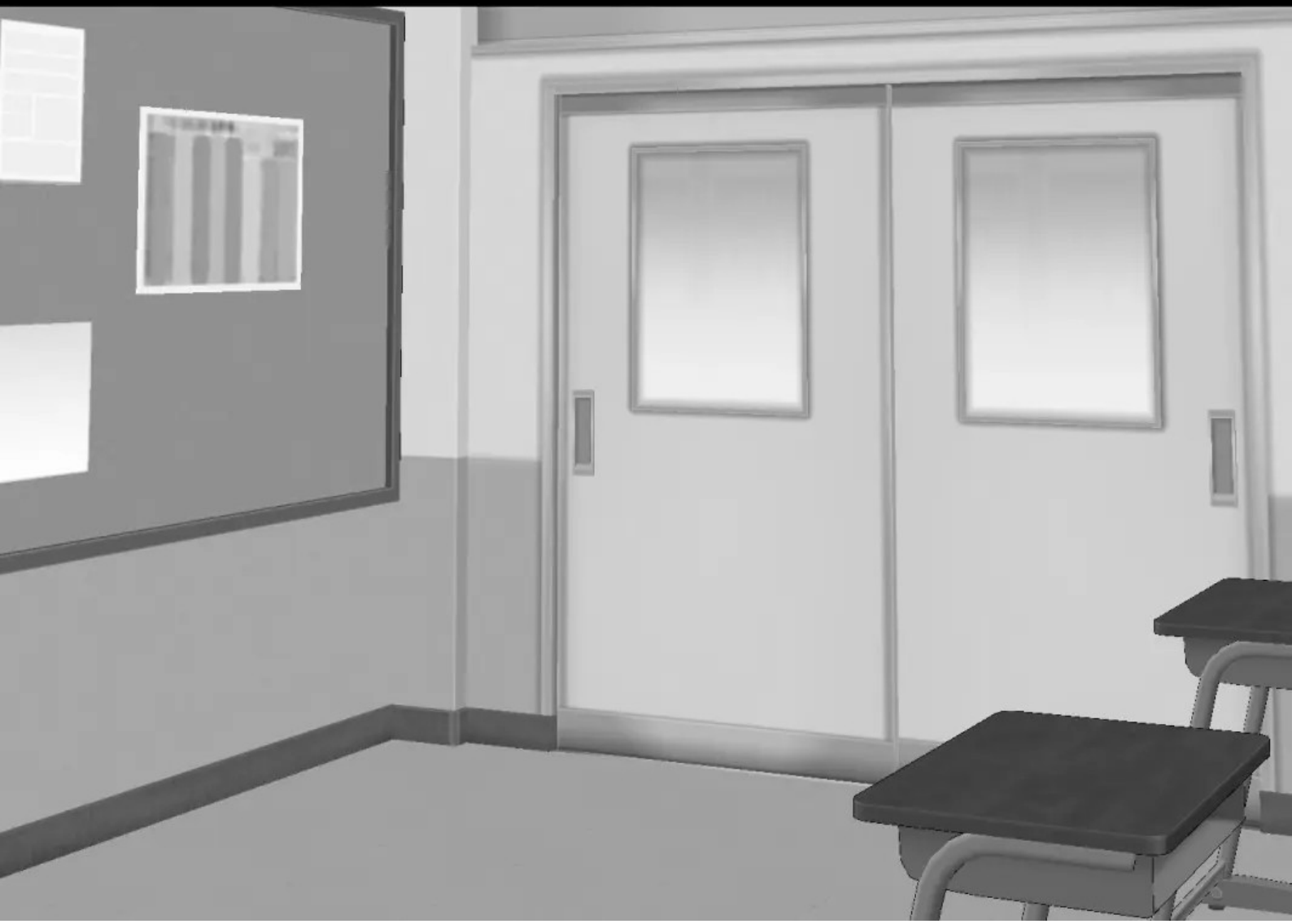
まあ、クラスメートからしたらその肝っ玉さが好かれているのだろうが。



□数日後の放課後

「用務員に会いに行ってみる！」

…と、急に摩夜に告げられた。



最近クラス女子の間であることが広まっていた。

『　用務員のおじさんが
女子生徒を変な目で見ている　』



恐らく、そんな事実はない。
完全な出まかせだろう。

しかし、学校内という若い学生のスペースにパッとしない中年のおじさんがいれば、なんとなく疎ましく思ってしまうのだろうか。

『用務員のおじさん冴えないよね(笑)』
『てか前にめっちゃエロい目で見られたんだけど』

そんな言い方をして少しずつネガティブな意識が固まっていく。

年頃女子のいけない所なのだろうが女子とは結局そういうものである。



気の毒にも思えてしまった。
少なくとも自分は噂だけで用務員さんをそんな目で見ないようにしてあげようと思った。

しかし女子グループのリーダー格ともいえる摩夜は「じゃあ私が決着つけてきてあげる！」と捲し立てた。
何の決着なのかは分からないが、変に意気込んでいた。

クラス女子も摩夜ちゃんが言ってくれるなら安心できる！と囃し立てる。



旧校舎にこじんまりと配置されている宿直室を休憩場にしているらしく、そこに向かおうとしていた。

冬馬「…」

旧校舎…放課後にもなれば教師も生徒も出入りすることなどほぼない空間、そんな場所で二人きり…。

冬馬「…俺も行こうか」

摩夜「だいじょーぶ！私一人で片を付けてくるから…♪」



俺の伝えたかった心配は多分、摩夜が思っているのとは違う。

そこをもっと意識して言うべきだったとは思うが、あまり過干渉なのもどうかと言い留まってしまった。

『もー(笑)冬馬ってこういう時心配し過ぎなんだってｗｗ』

恐らくそんな感じで流される。

あれこれ考えているうちに摩夜はさっさと教室を出て行ってしまった。

クラス女子たちは摩夜ちゃんならやってくれる！と鼓舞する。



男子A「摩夜ちゃんスゲーな大人相手でもビシッと言うもんな」

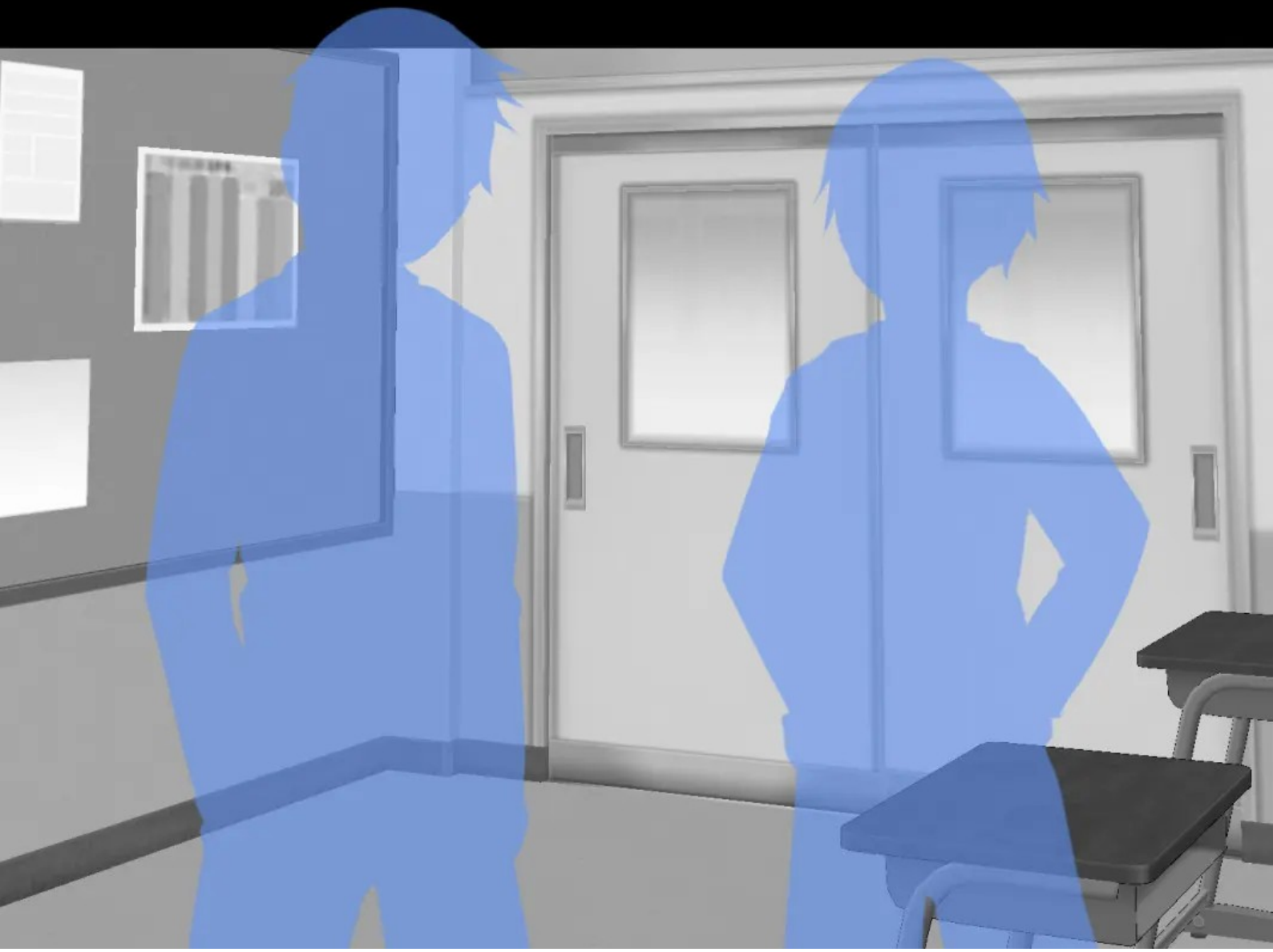
男子B「俺も何の理由なくてもビシッて言われたいもんｗ」

冬馬「ｗｗでも用務員さん気の毒だな、別に何も起こらないだろうけど」

男子A「まあ、ただの噂でどうこう詰められても困るだろうな」

男子B「本当にただの噂だったらな」

冬馬「…はは」



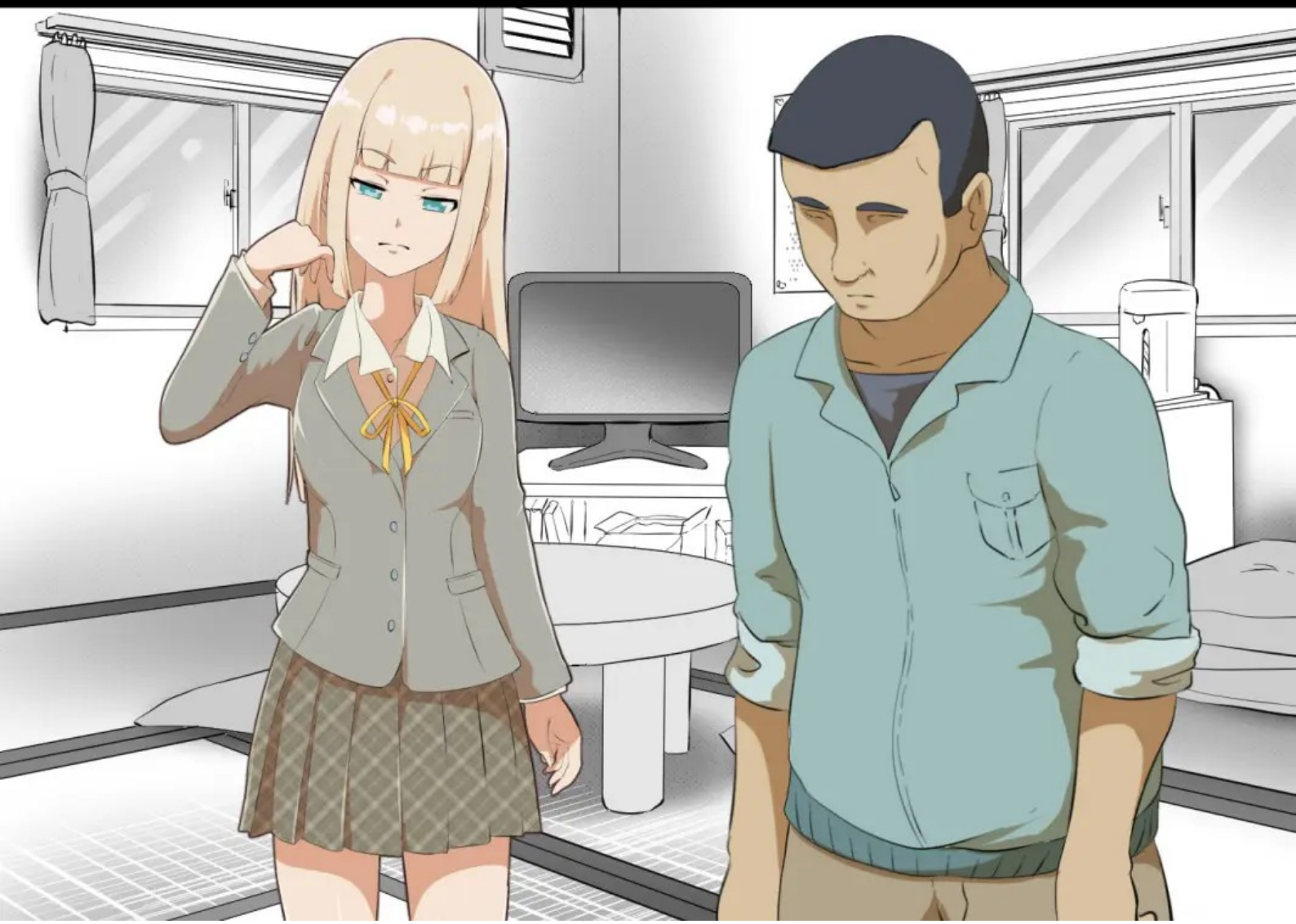
冬馬「…」

＝＝＝

□宿直室

摩夜「…」

吉田「…」

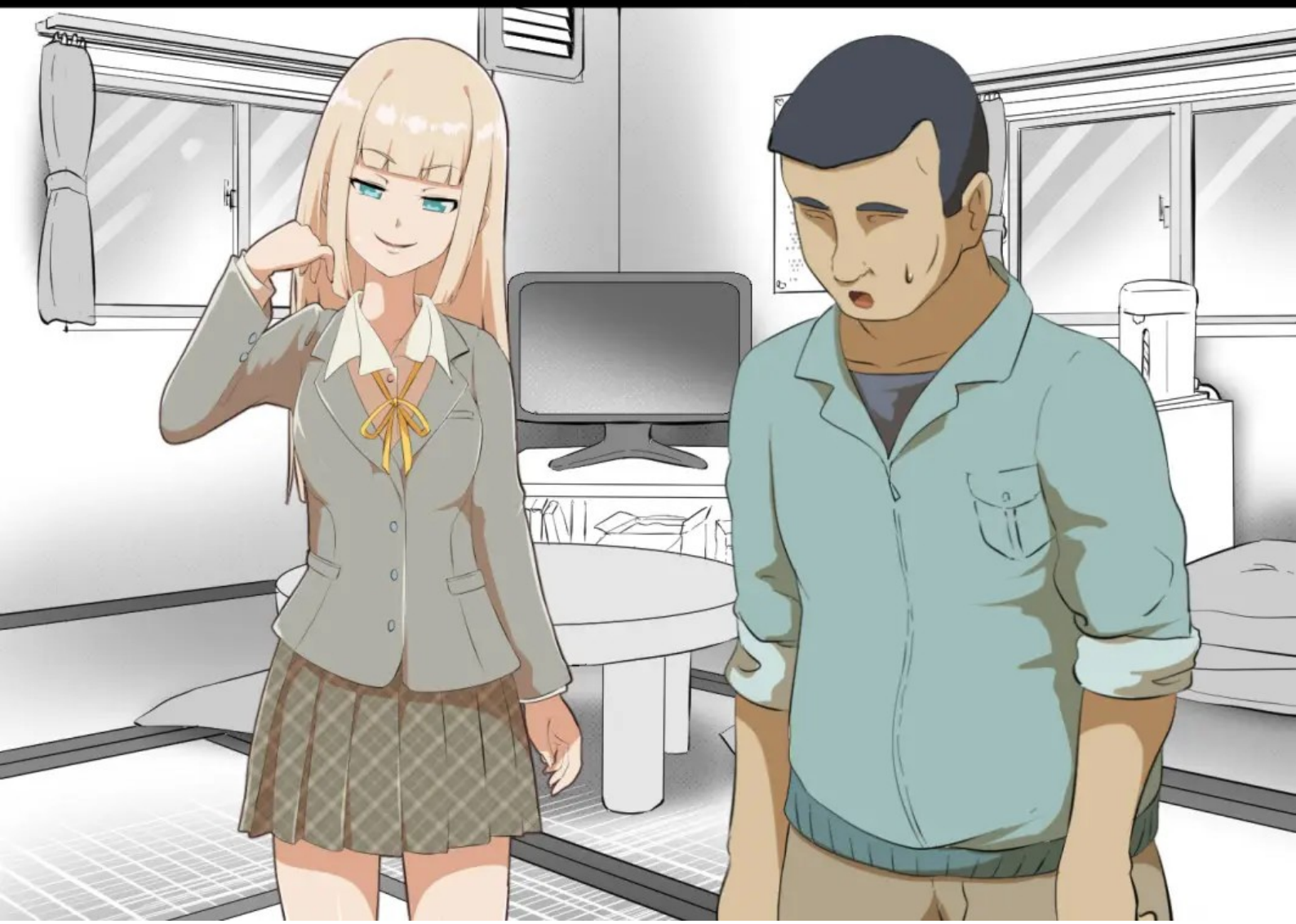


用務員の吉田育雄（よしだいくお）はちゃぶ台を挟んで、摩夜と対峙していた。

急に部屋に乗り込んできた女子生徒。
驚いたがとりあえずお茶を出した。

吉田「…つまり、俺が女子生徒を可笑しな目で見ていると…？」
摩夜「うん」

吉田「…そんなわけ」
摩夜「見てるでしょ♪」
吉田「…」



摩夜「ていうか、ここって静かだよね、マジで誰もこない空間じゃん」

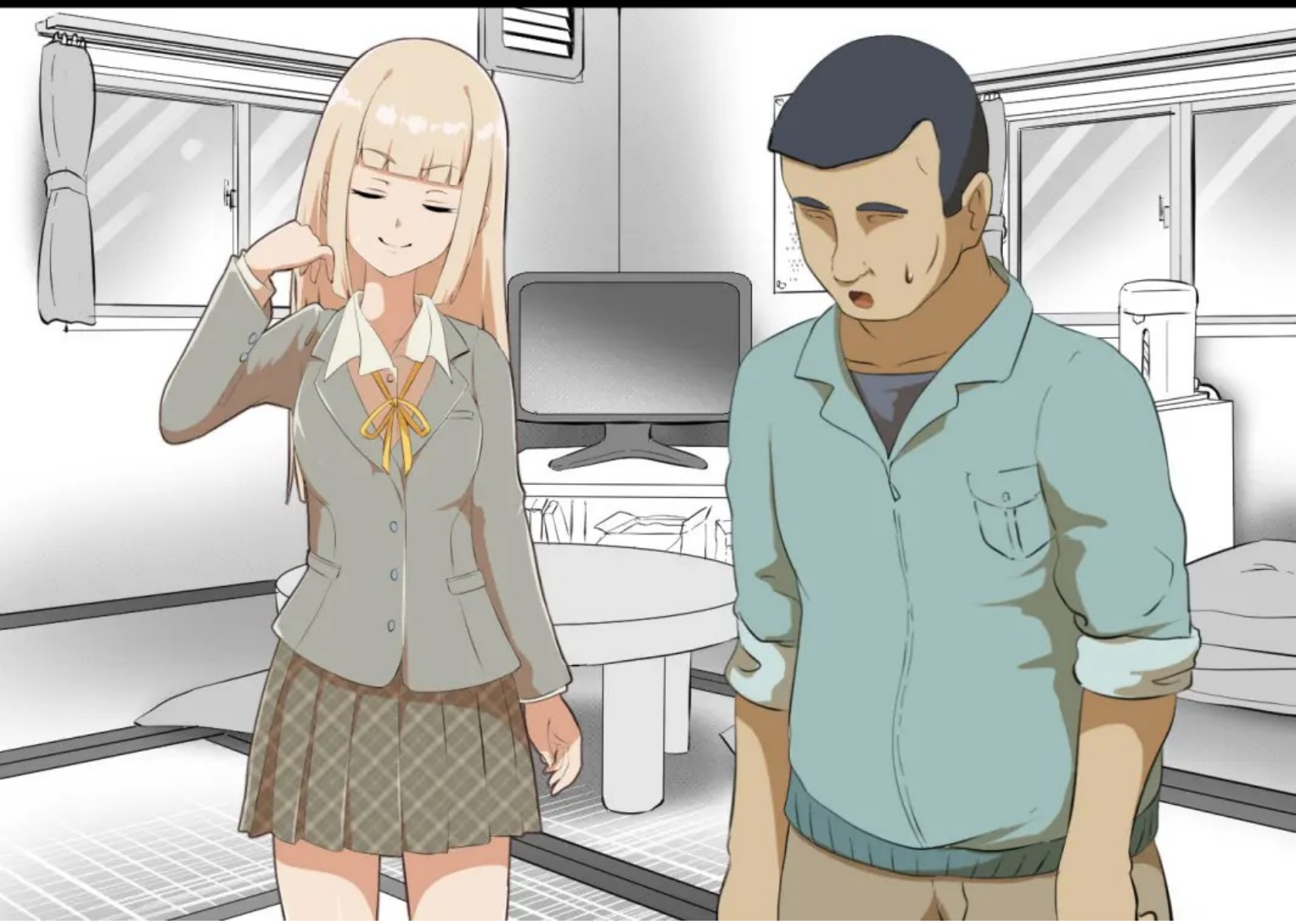
吉田「まあ、俺は居やすいけどな」

摩夜「…」



摩夜は立ち上がり、部屋を見回す。
そして窓の鍵をロックしてカーテンを引く。
ドアについている簡易的な鍵も閉めた。
吉田はその様子を不思議そうに眺めている。

今のところ、吉田にとって目の前にいる女子生徒は美人だが微妙に変わっている、といった印象だった。
一人でこんな場所にズカズカ侵入して、難癖をつけてきてるのだからそうなるのだろうが。

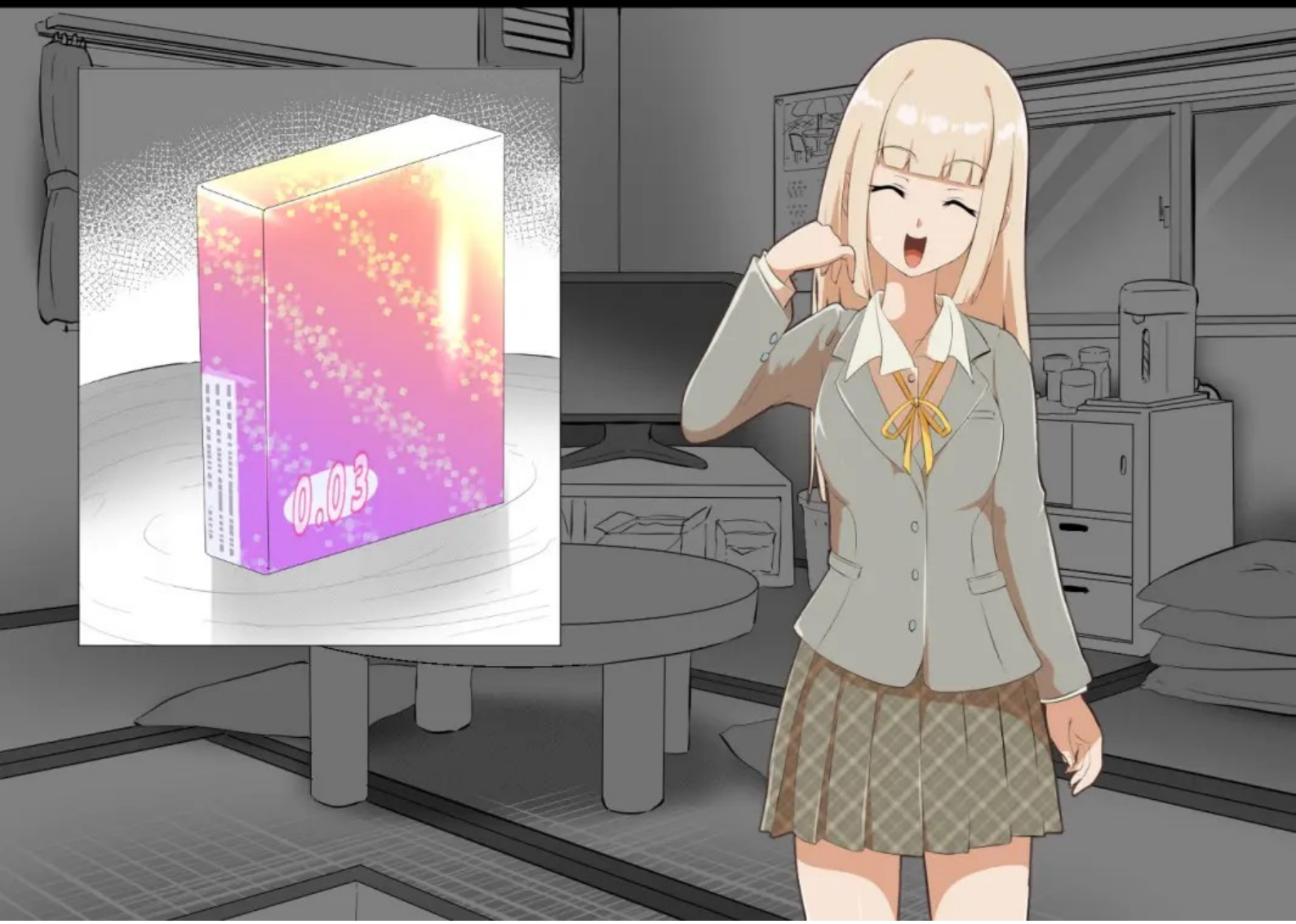


その変わった女子生徒はちゃぶ台の前で座りなおした。
お茶を一口すする。

摩夜「…じゃーん！これなんでしょー？」

吉田「！」

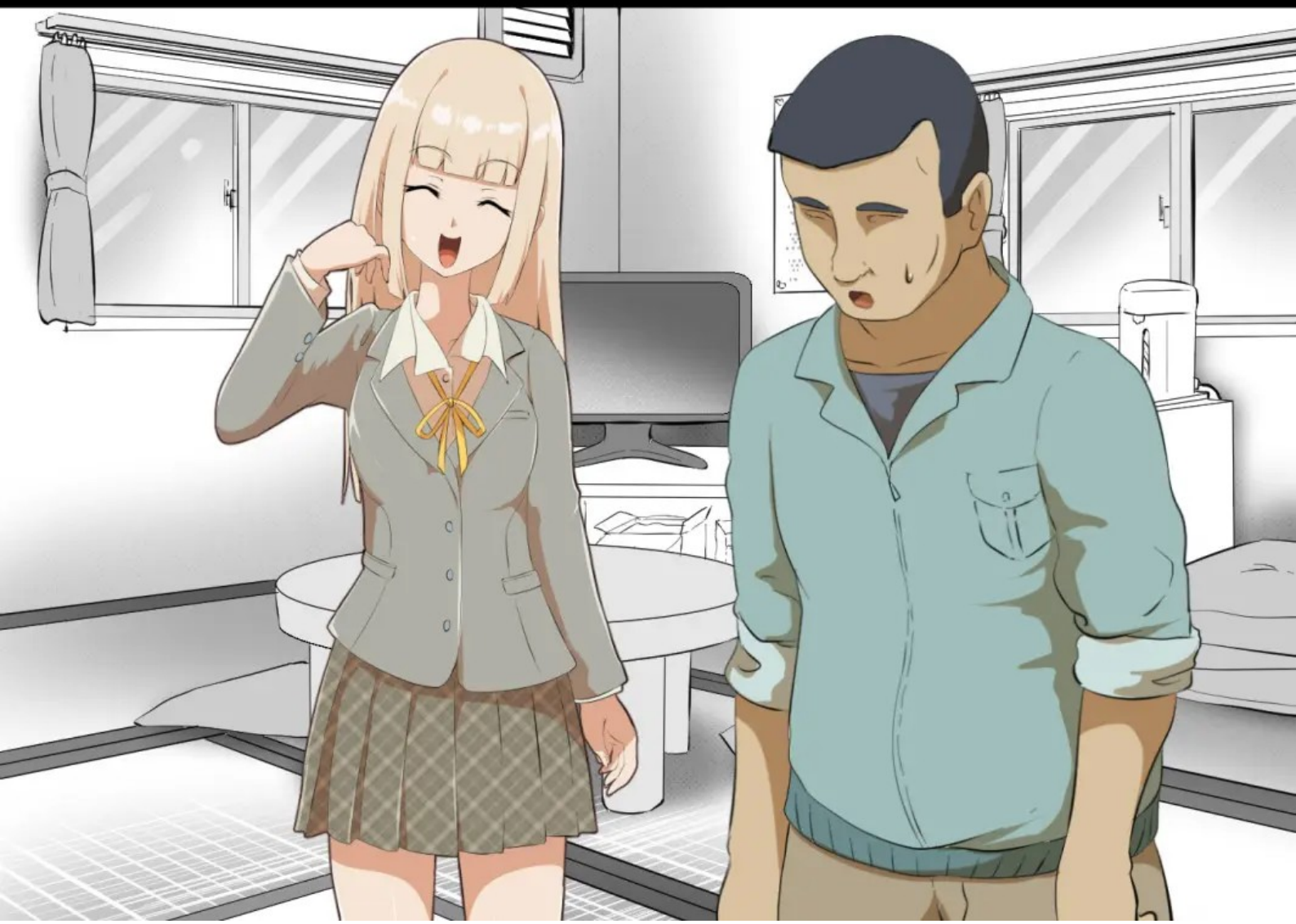
摩夜がカバンから唐突に出したもの、ラメの入った変にギラつく光沢感のある小箱。
そんな主張の強いカラーリングでありながら商品名などの表記はない。
ただ、『0.03』という数字は目に入った。



摩夜「フツーにネットショップで買えるんだねｗｗサイズ？とか薄さ？とかよく分かんないけどテキトーに選んだ(笑)てか微妙に高くて腹立つんだけど、おじさん払ってｗ？」

吉田「…」

吉田にはこの女子生徒が何を考えているのかまったく分からなかった。

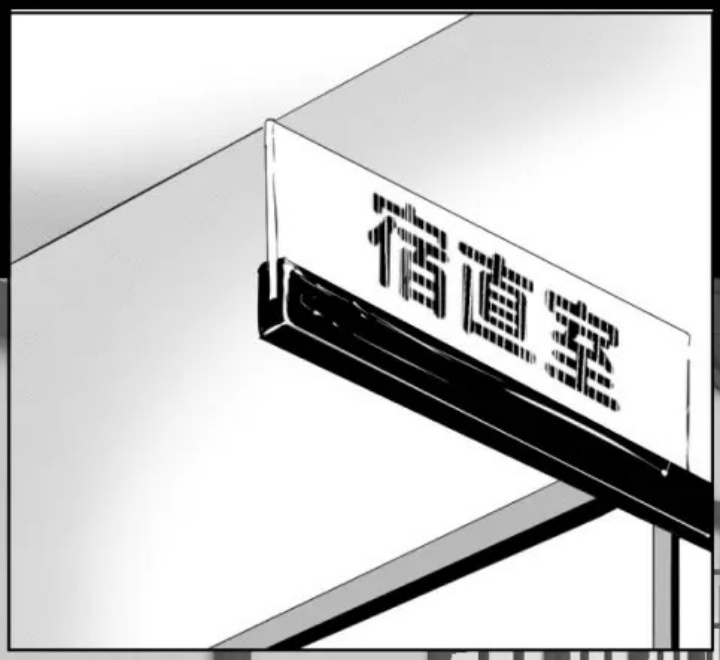


摩夜「ただでさえ人っ気のない放課後の旧校舎…、あるのかさえ認知されてない宿直室…」

「さらにカーテンも鍵も閉めて…ほぼ密室空間です…」

「こんな可愛い美少女と二人きりの状況で避妊具も一応あります…」

吉田「…」



摩夜はスマホを取り出しタイマーアプリを開く。

摩夜「10分っと…♪」

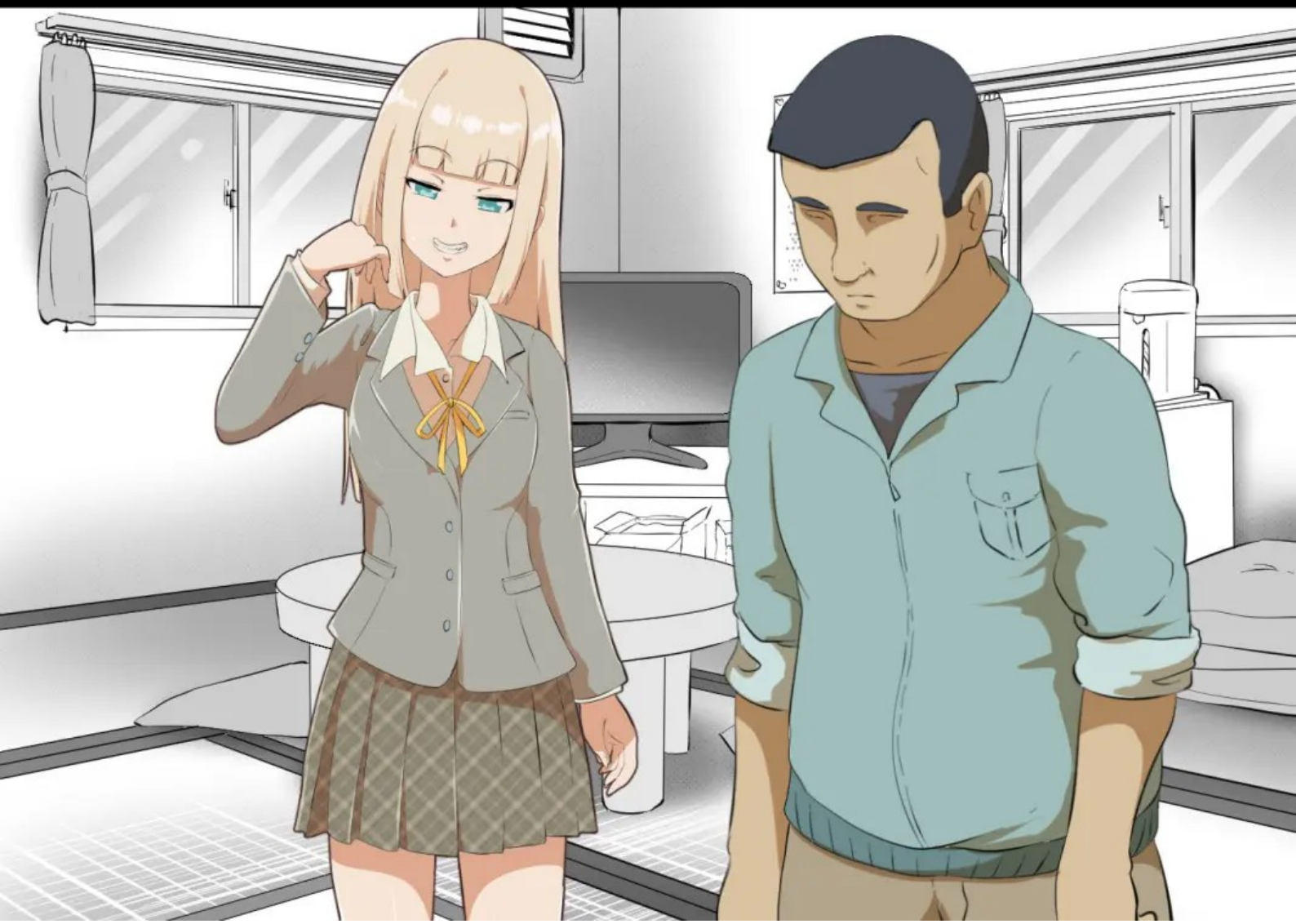
「ねえおじさん、10分間私に何もしないままでいられる？」

「この…あとは服を脱ぐだけでおっぱじめられる状況で…♪」

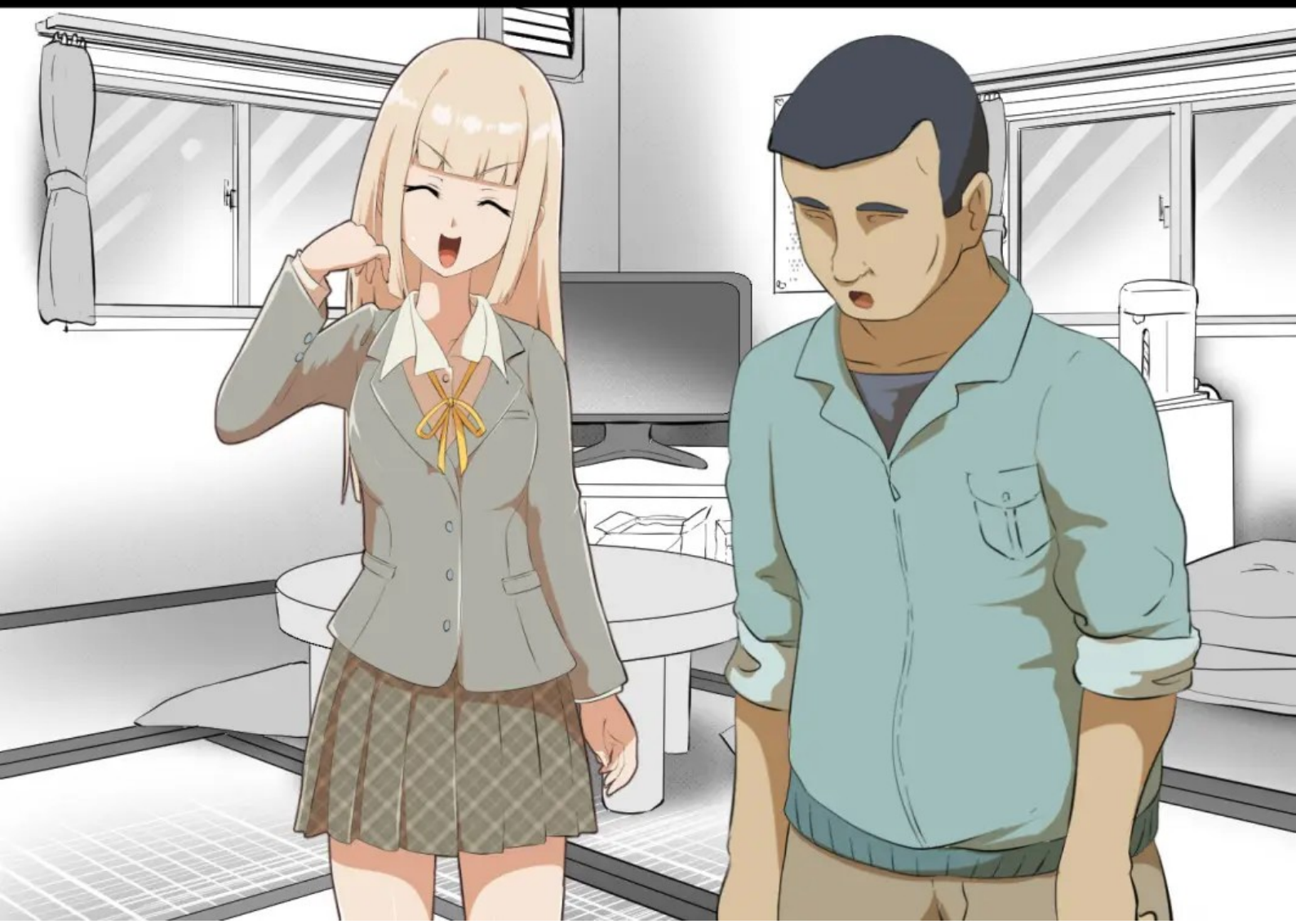
吉田「…」

摩夜「あ、ちなみにもし手を出したら普通にスマホで証拠撮るから安心してねｗｗ」

「煮るなり焼くなり上手に仕立ててあげるからｗｗｗ」



吉田「…名前、なんていうんだ？」
摩夜「あ、ごめん言ってなかったっけ(笑)？摩夜ちゃんでーす♪倉原摩夜♪よろしくー♡」
吉田「…摩夜」
摩夜「ちょ…(笑)いきなり名前呼び捨てって…ｗｗ」
吉田「…」
摩夜「なに？おじさんｗ？」
吉田「…」

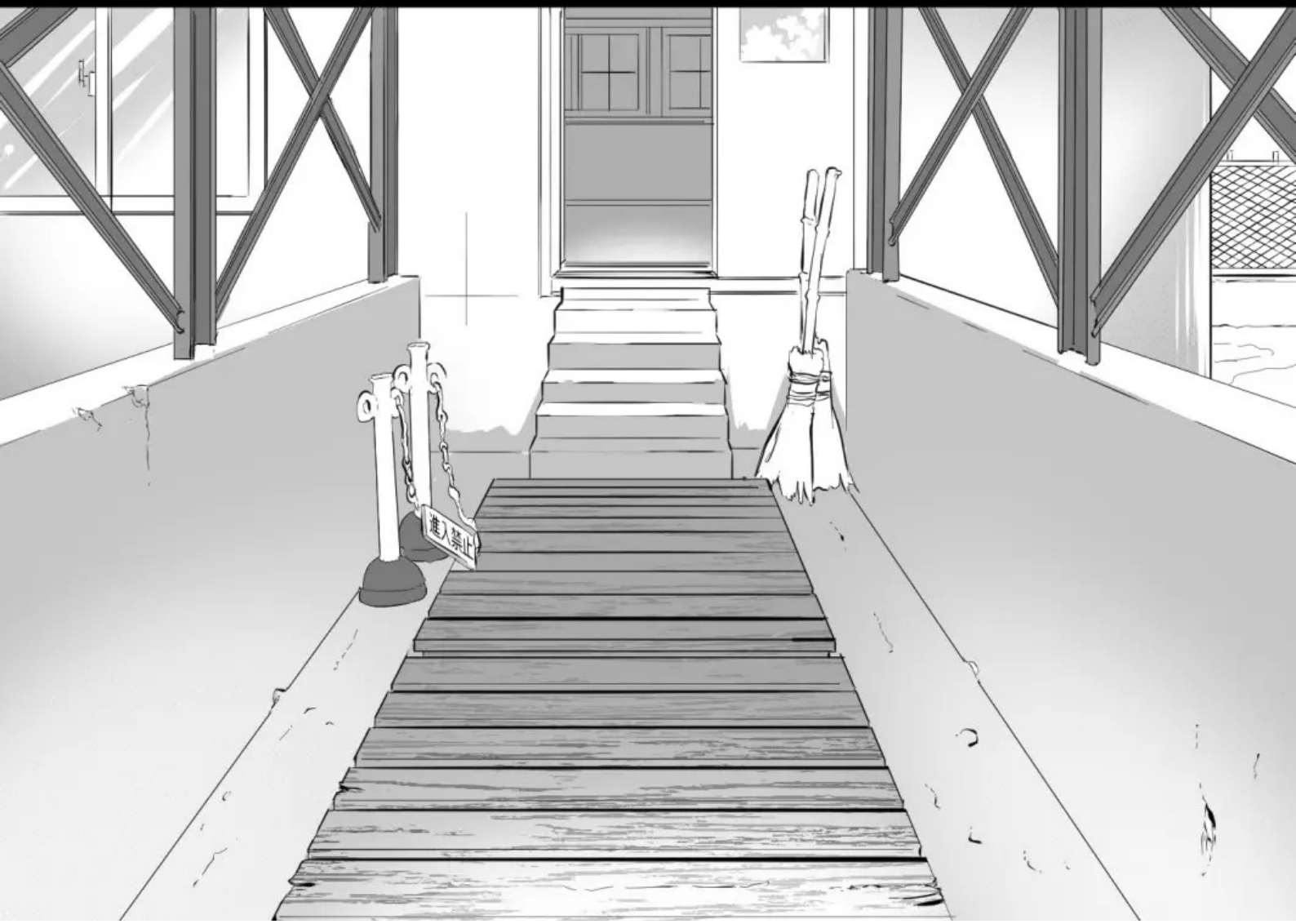


＝＝＝

冬馬「…」

放課後にもなれば生徒も教師も出入りすることはない旧校舎。

あるのかさえ分からなかった宿直室に用務員と二人だけの状態。



…やっぱり心配になった。

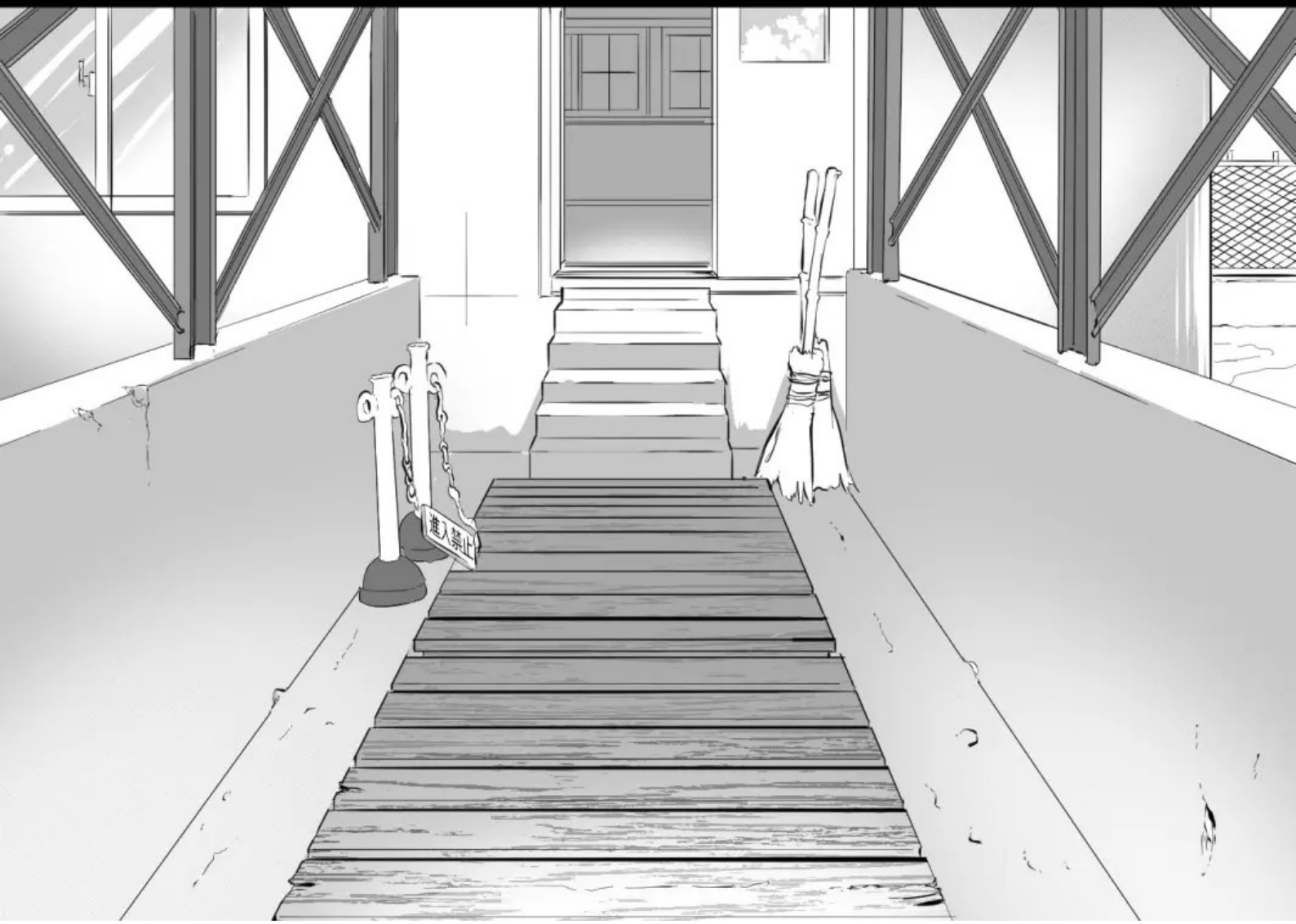
無意識に…いや、幼馴染としての意思で俺は旧校舎に向かっていた。

ただ、ドアから直接入るわけではない。窓からチョロッと中の様子を覗いてみるだけだ。

…もし何でもない状況だったとしたら、わざわざ心配で見に来たなんて確実に笑われる。

摩夜はしばらくからかいのネタにするだろう。

心配ではあるが悟られたくはない、といった年頃男子の妙なプライドを優先してしまった。



冬馬「…ここか」

端の方にこじんまりと設置してあった。
しかし、遠めでも分かったが窓にカーテンが引かれてある。
大体よく考えたら本当に摩夜がここに居るのかさえ定かではない。

冬馬「…」

一瞬何やってんだ俺、と思ったが
一応宿直室に近づいてみる。



冬馬「…ん」

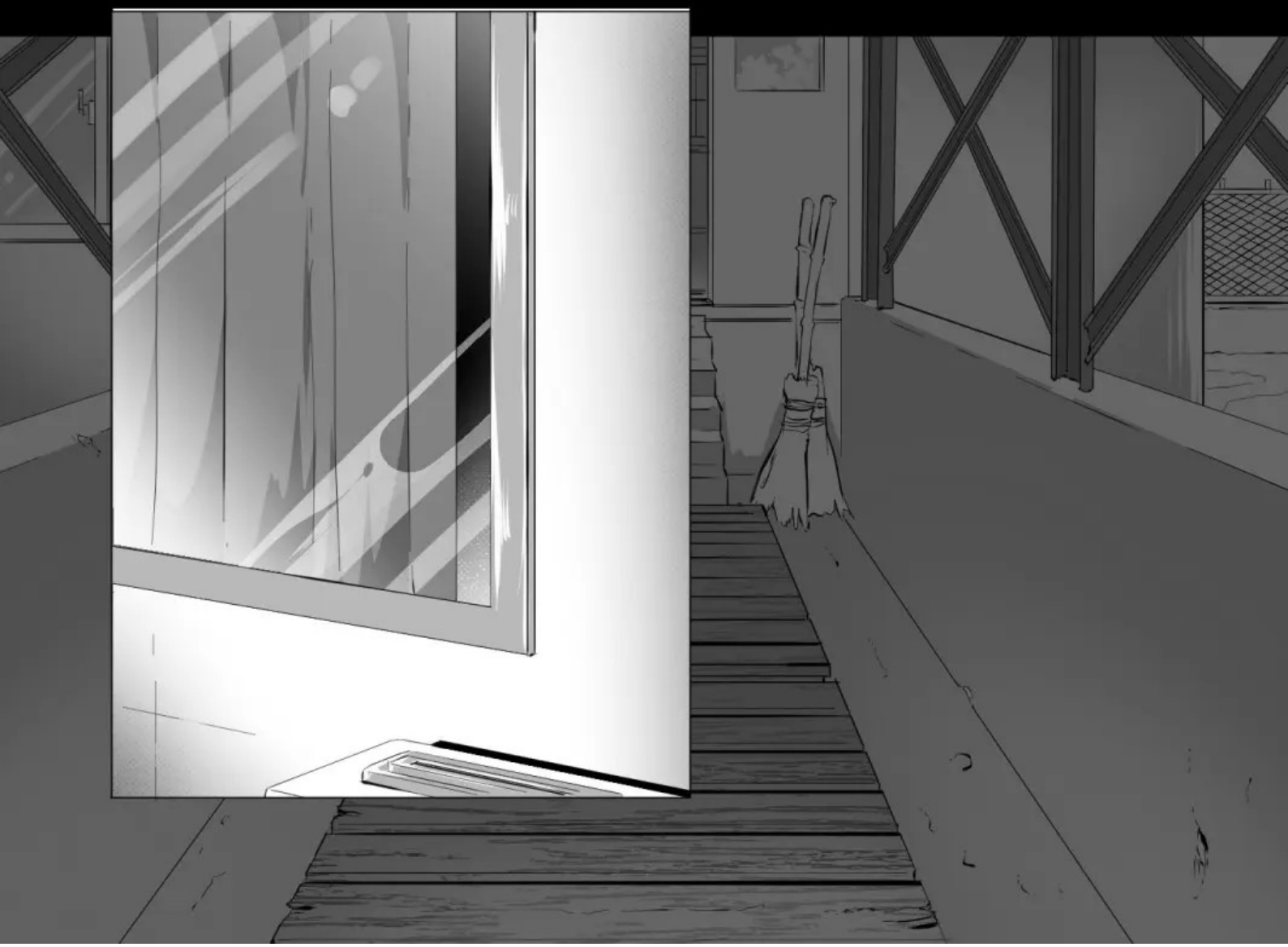
よく見るとカーテンが完全に締まりきっておらず少しだけ隙間があった。

蛍光灯の明かりも見えるため多分誰かしらが部屋にいる。

冬馬「…」

ゆっくりとした動作でそうッと中を覗いてみる。

…勝手に覗いている立場なのでもし部屋で用務員さんが何をしていても、とやかく言うギリはない。シコってたとしても。



「逃げるなっ…この！」

「ちょっやめて!!ホントに洒落にならないって!!」

「ハァハァ…自分からこんな状況作っておいて…馬鹿かお前…!!」

「マジでやる気なの…!?ヤバッ…おっさんヤバすぎるって…!!」

「…っ!!」

「んっ…！」



吉田「おぉ…お」

摩夜「ぁ…ぁあ…！」

吉田「…っ!!」

摩夜「～～～っ!!」



摩夜がいた。用務員さんも。

閉め切った窓越しなので何を話していたのかはよく聞き取れなかったが、それでもかなり張った声量でやり取りしていたようで、平和的な内容ではなかったことは分かる。

あっという間に摩夜が目の前で制服をひん剥かれ、襲われた。

本当にあっという間だった。



用務員さんがその巨躯で覆いかぶさる形だったので摩夜は視覚的にほぼ見えなくなった。

ハイソックスの脚だけが天井に伸びて、用務員の腰の動きと連動するようにカクカク揺れている。

冬馬「…」

年季の入ったちゃぶ台にはコンドームが置かれていた。

自分も実物を見るのは初めてだったが、年頃男子がネットや友達から仕入れるレベルの知識はある。



（よかった、ちゃんとゴムはしてるのか。）

良くはない。よくはないのにとりあえずそんなことを思い、変に安堵してしまった。

カーテンの隙間から見えるその状況が信じられな過ぎて、どうにかして意識をそらそうとしてしまう。

幼馴染が目の前で、中年用務員とセックスしている。

もちろん合意ではない。どう見ても。

合意であったとしても、止めなくてはいけないことだろう、幼馴染として。

カギが締まっているのなら、窓を割ってでも。



しかしそう頭で意識するだけで体が一切動かない。

ただ、傍観しているだけだった。

なぜなのか全く分からない。

驚き、怒り、喪心、いろんな感情が渦巻いているのは確かなのに。

それなのに、なぜ…。



摩夜「～～～っ!!」

自分は、窓越しに幼馴染をひたすら傍観していた…。



＝＝＝

□教室

摩夜「～～～っ(笑)」

クラス女子A「～～～ｗｗ」

クラス女子B「ｗｗ♪」



冬馬「…」

次の日、摩夜はいつも通りの摩夜だった。

何も変わらない、自然とクラスメートが周りに集まってくる中心的存在。

…むしろいつも通りでおかしいのは自分の方なのかもしれない。

朝も当たり前のように一緒に登校してきた。

何でもないような会話を交わしながら。



摩夜に対してなぜ何もなかったかのような態度でいられるのかよりも、なぜ自分は何も見ていなかったような態度でいるのかが分からなかった。

冬馬「…」

摩夜と…用務員さんはこれからどうするつもりなのか。

とはいっても、合意なしの一方的な行為だったのでどうやっても摩夜に主導権があるとは思うが。

冬馬「…」



十数年来の幼馴染として、摩夜の悪い癖というか妙な可能性が頭をよぎってしまった。

摩夜は…良くも悪くも我が強い。誰が相手でも自分の意見を通すことができる。

だからこそ同級生からの信頼も厚いのだろうが、それは良く言えば、である。

自分の思うようにならないと結構子供っぽい反抗心がでる。

用務員にされた行為自体より、一方的な相手ペースでされるがままだったことを悔しいと感じているかもしれない。

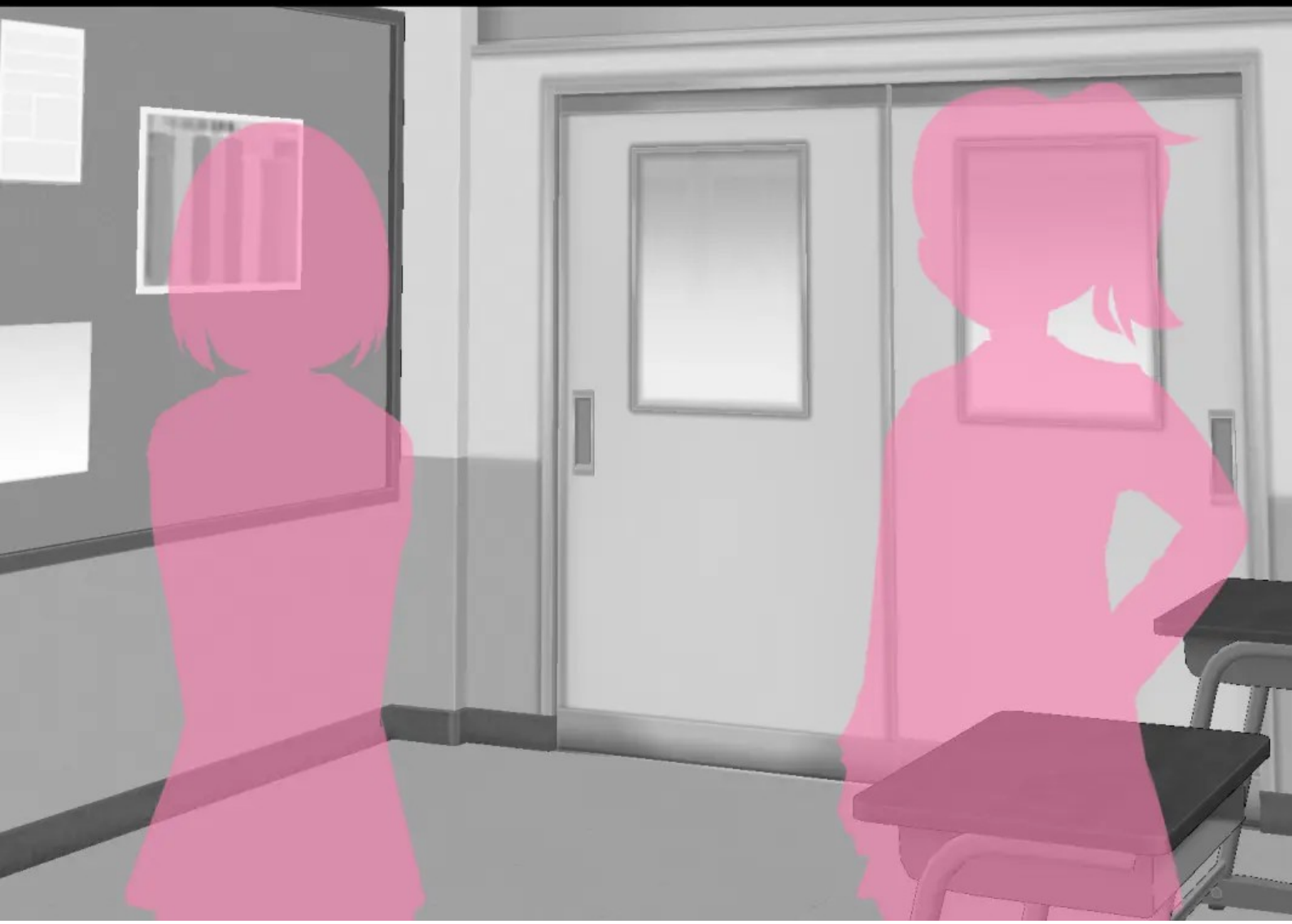


頭であれこれ考えていたら、いつの間にか教室内に摩夜がいなかった。

冬馬「あれ…？」

女子A「摩夜だったら用務員とこいったよ、今日もカマシテくるから！って意気込んでたよ(笑)」

冬馬「！」



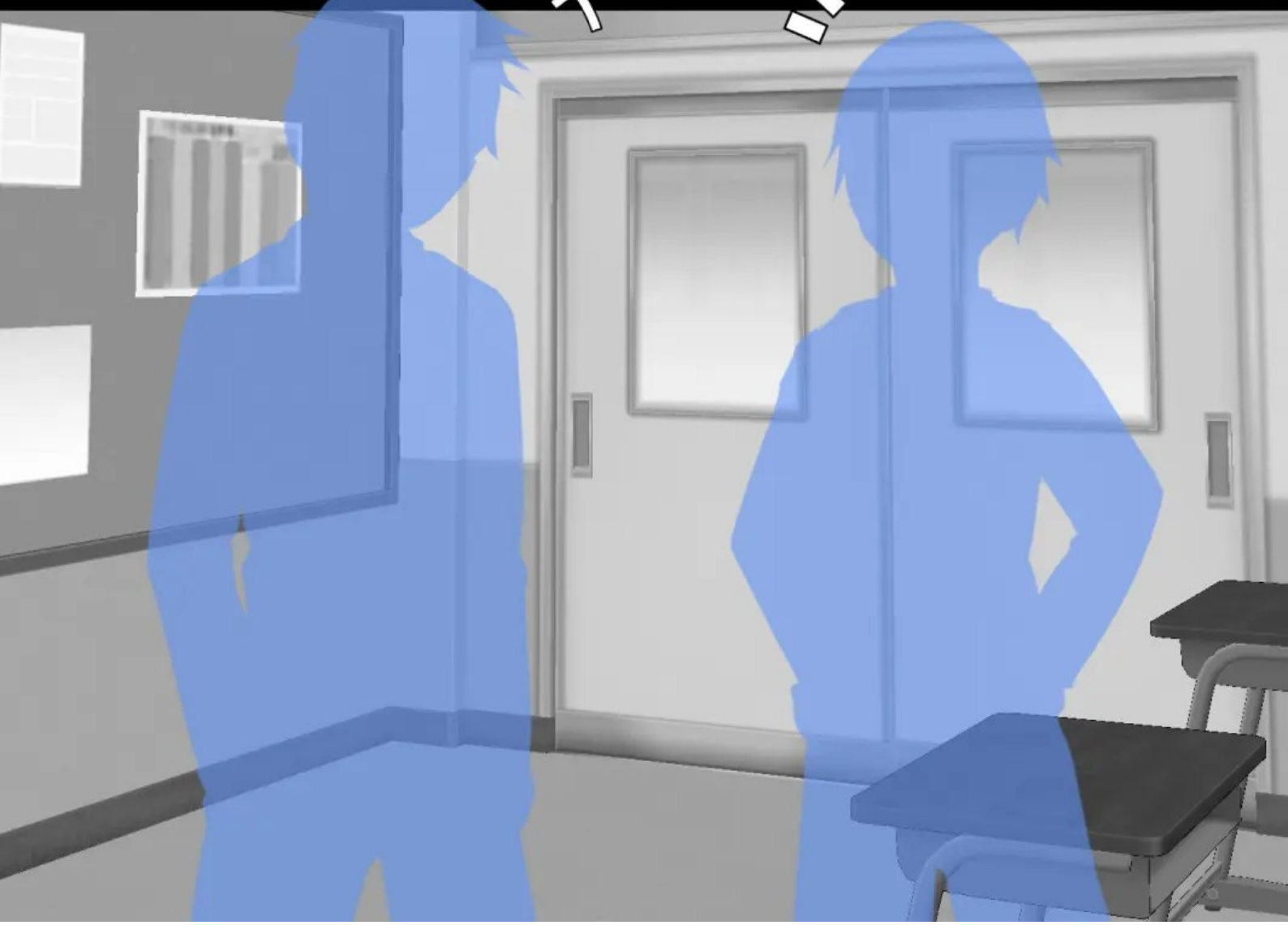
男子A「摩夜ちゃん大人相手でも容赦ないな」

男子B「ぶっちゃけ用務員羨ましいわｗ面と向かって摩夜ちゃんに説教されるのｗｗ」

冬馬「…はは」

男子A「様子見に行ってみるか？」

冬馬「あ…！いや、それは…」



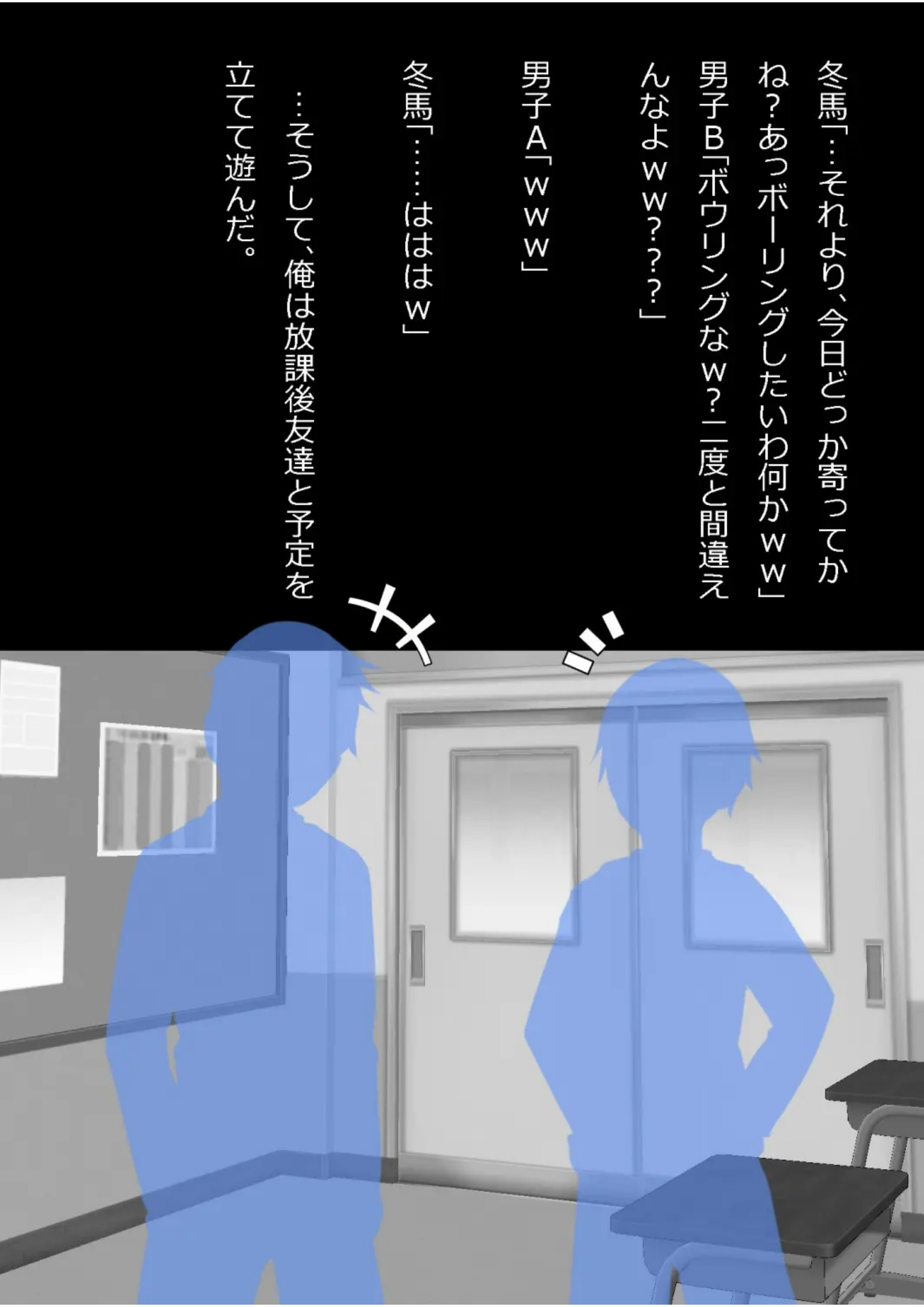
冬馬「…それより、今日どっか寄ってかね？あっボーリングしたいわ何かｗｗ」

男子Ｂ「ボウリングなｗ？二度と間違えんなよｗｗ？？？」

男子Ａ「ｗｗｗ」

冬馬「……ははははｗ」

…そうして、俺は放課後友達と予定を立てて遊んだ。



…逃げ、なのだろうか。

いや、大丈夫。摩夜は考えがあって自分の意思で宿直室に向かったんだ。

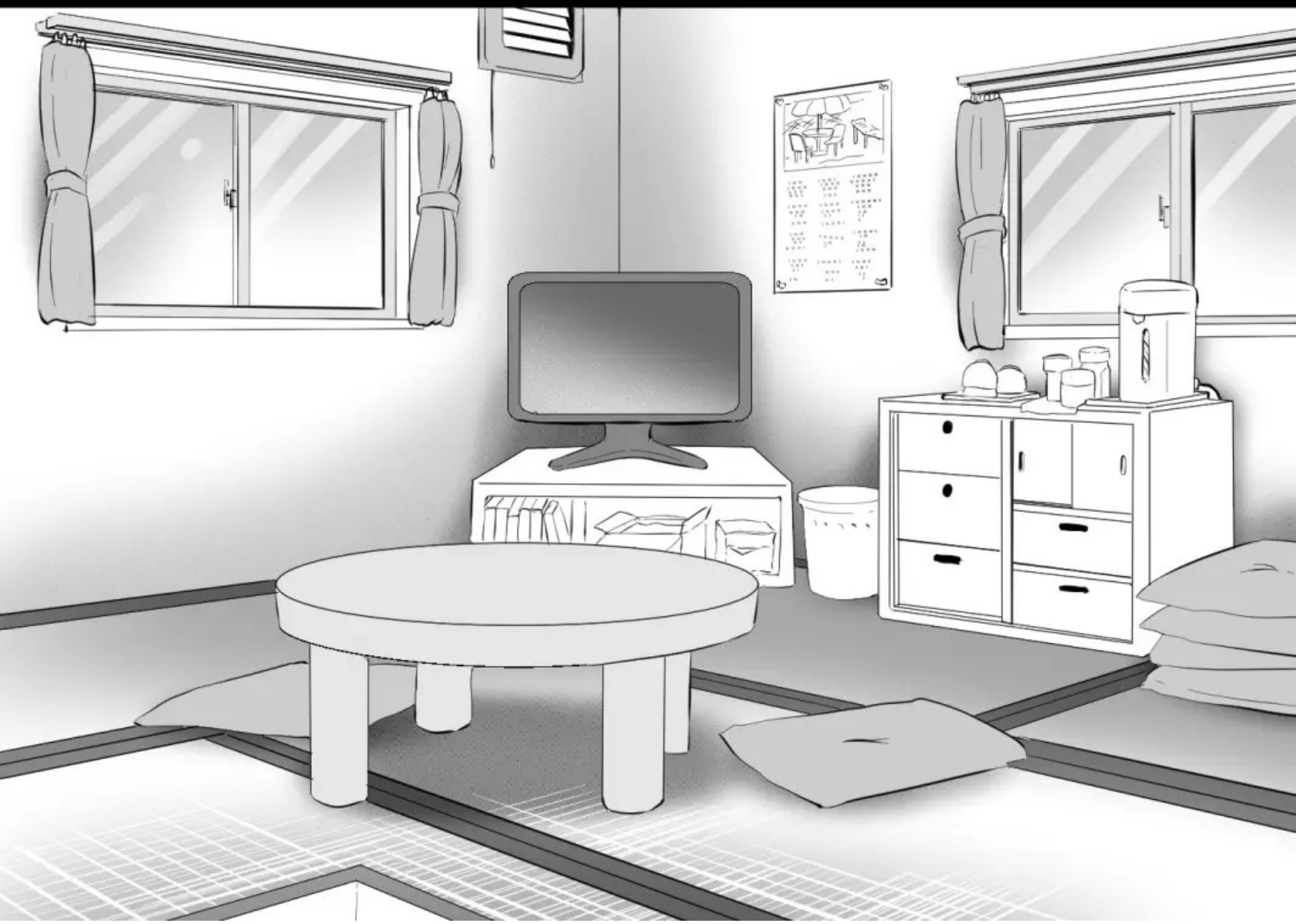
本当に困ったらいの一番に俺に相談してくるはず。

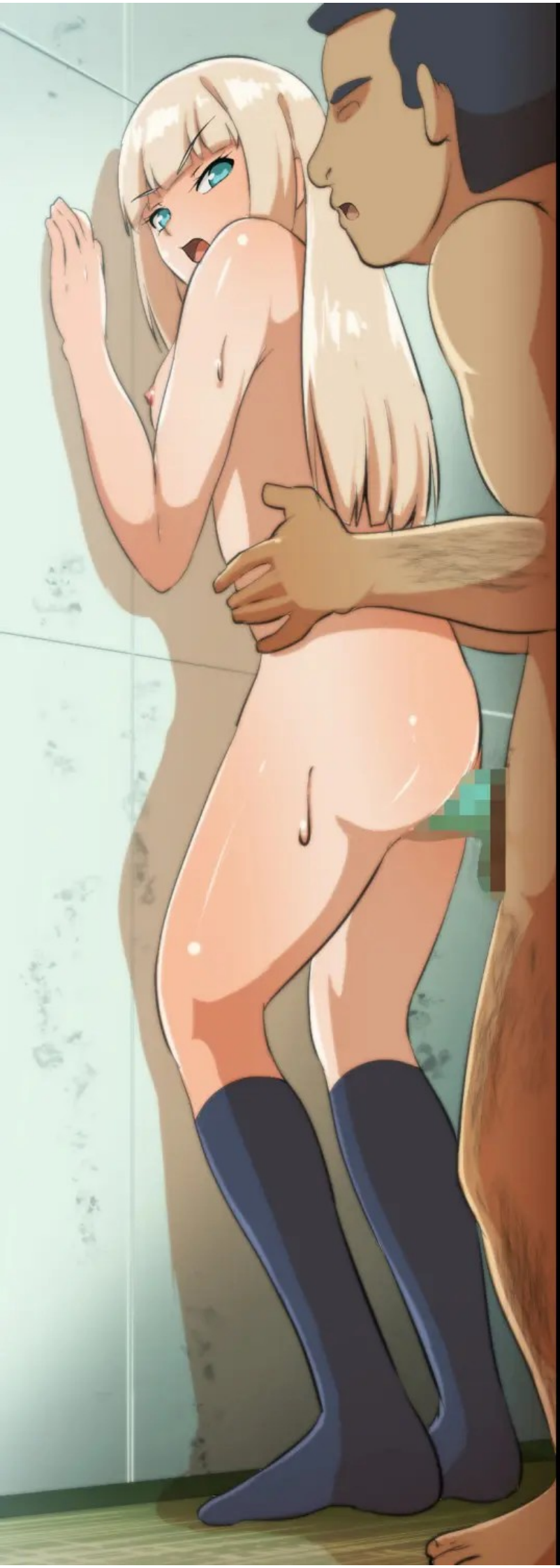
大丈夫…。



「…んっ」

「…まさか本当に今日も来てくれるなんてな」



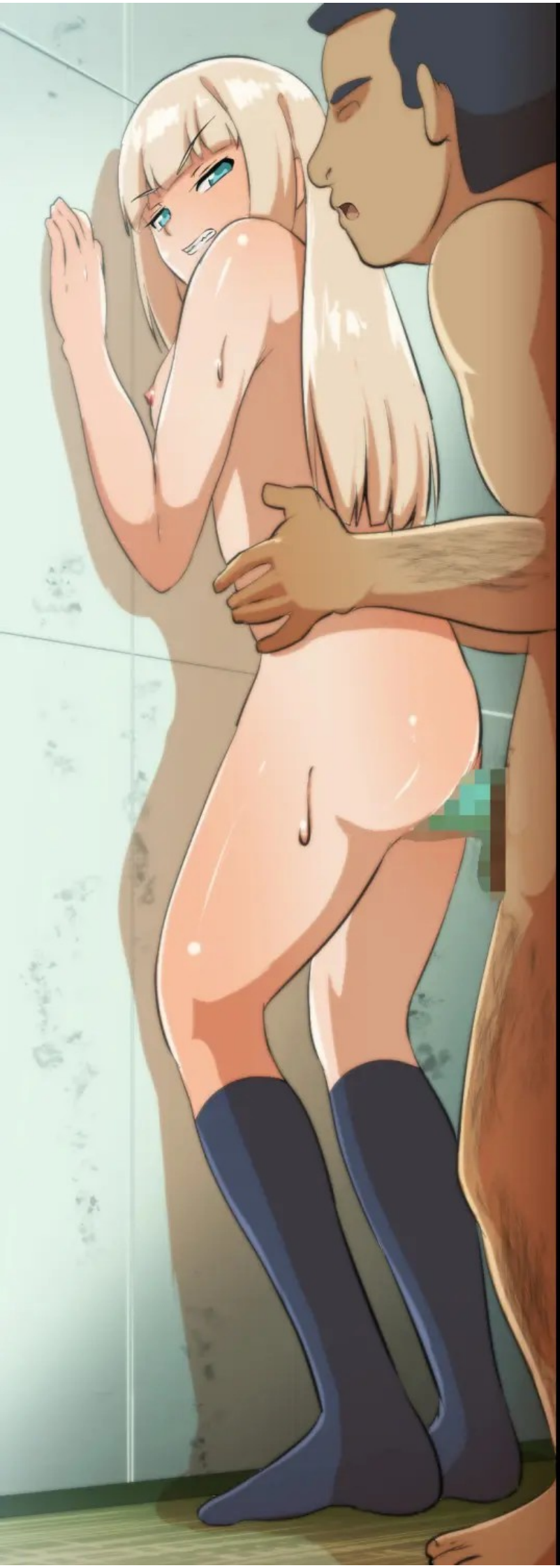


摩夜「…」

吉田「煮るなり焼くなり好きにしてくれていいんだぞ？こんな冴えない
キモ中年が摩夜みたいな美人とデキたんだからもう思い残すことはない」

摩夜「…それがムカつくんだけど」

吉田「？」



摩夜「やるだけやってハイ俺の負けでいいでーすwみたいな感じが腹立つ！」

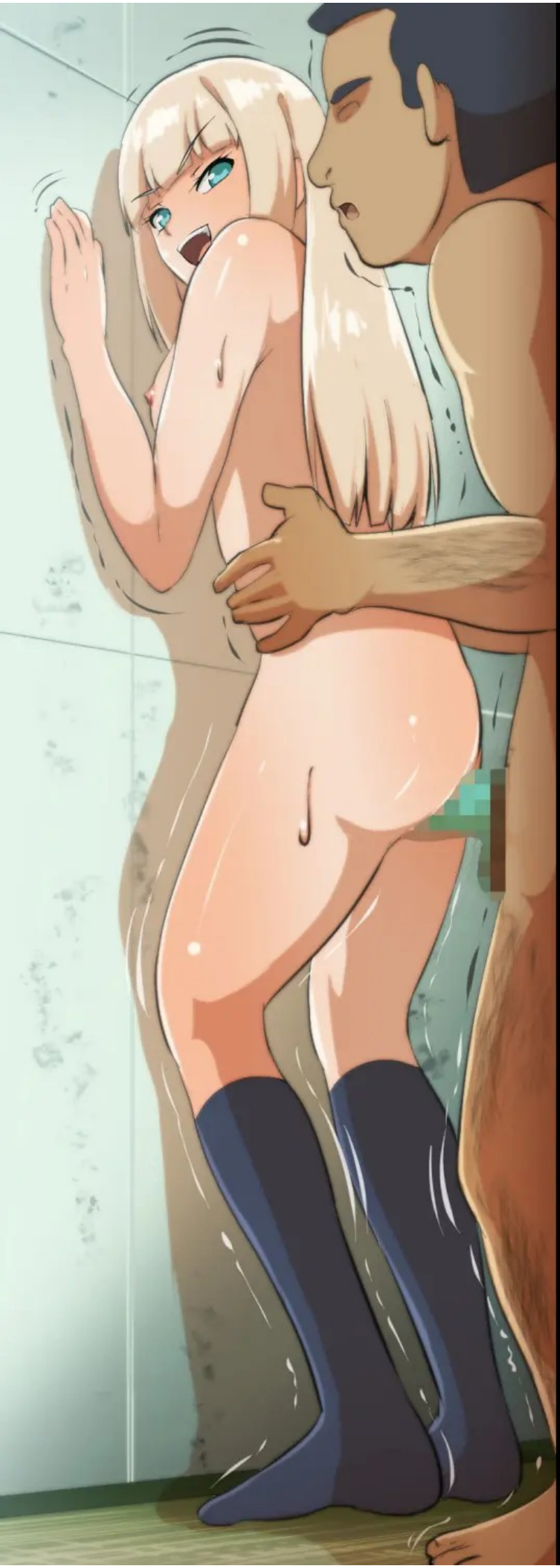
「負け逃げっていうか、おじさんにセックスで負けたままみたいな形になってるのがなんかメッチャ嫌なの」

吉田「な、なんだそれ」

摩夜「私、別に昨日全く気持ちよくなかったから！おじさんはただ形だけのセックスをした気になってるだけ!!分かった!?」

吉田「…」

摩夜「セックスでおじさんをグデグデにしてひーこら言わせてやるから！」



吉田「それはつまり…お前にひーこら言わせられるまで俺はセックスに付き合わされるってことか？」

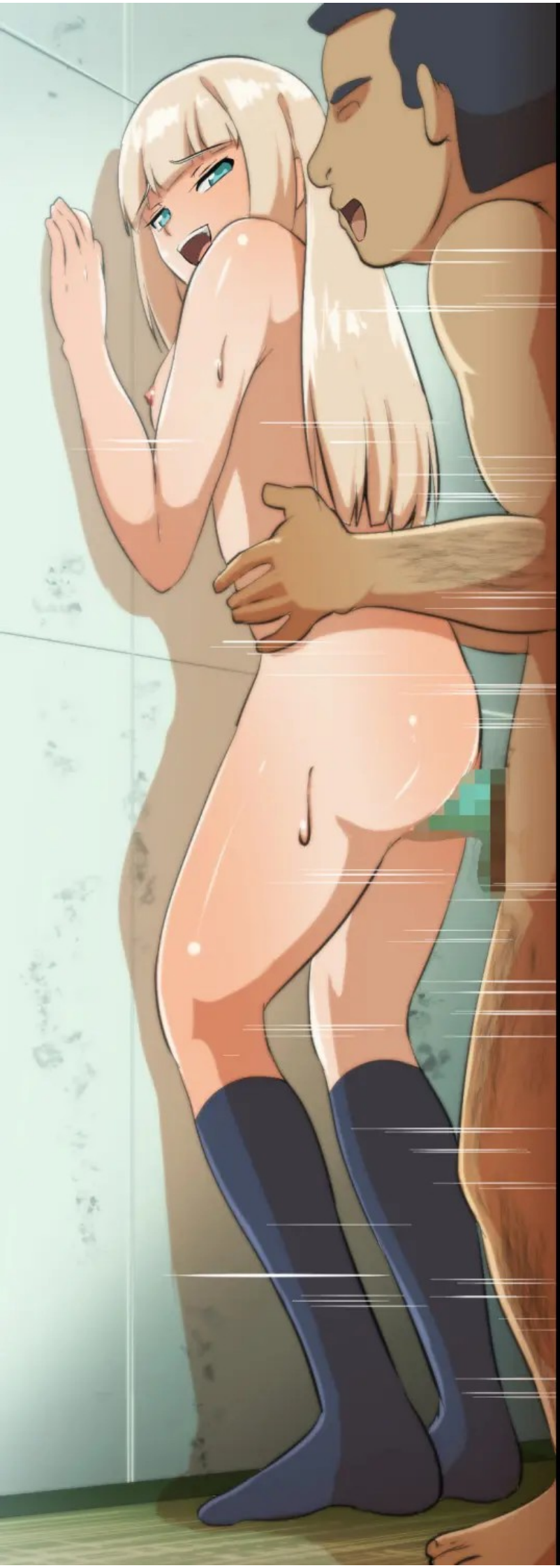
摩夜「まあ、そうなるんじゃないの」

吉田「…俺、何のデメリットもなくないか？ただひたすら可愛い子とヤレるってだけだろ」

摩夜「そんなこと言ってられる(笑)？絶対後悔させてやる…♪」

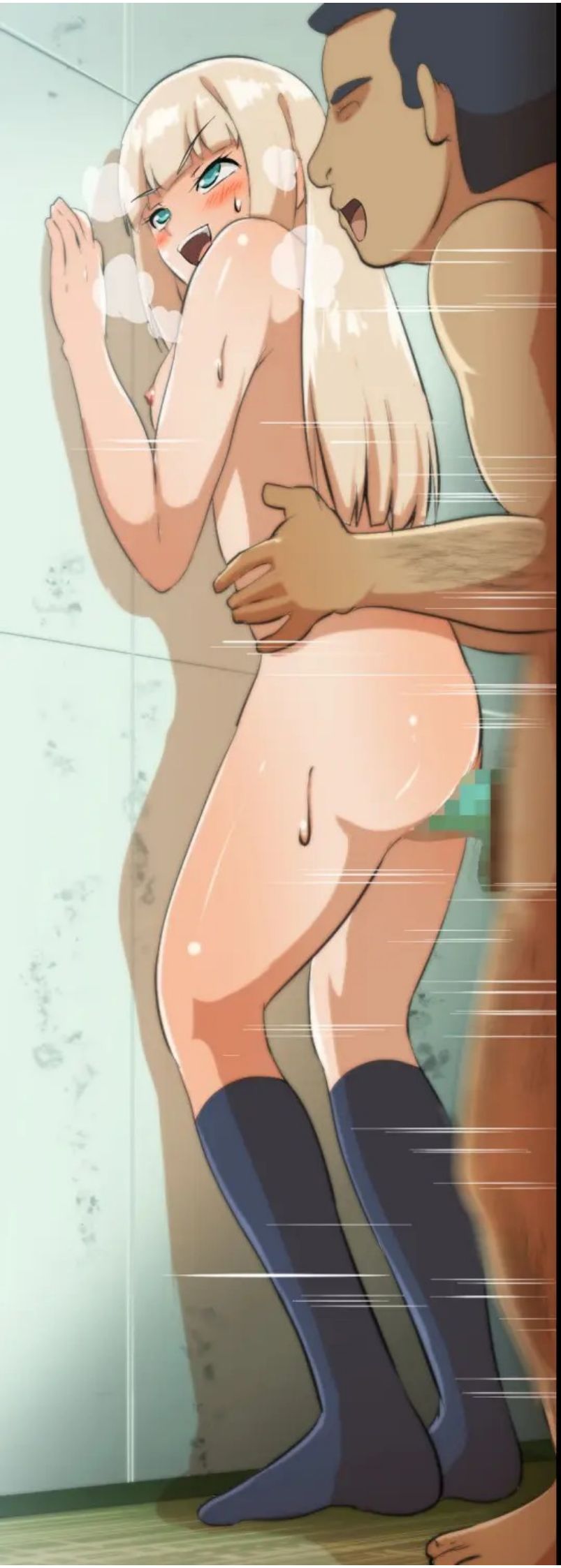
「あ、それと私が満足したら普通にそれまでのこと全部周りに報告するから♪」

「一方的に無理やりされましたって形で(笑)」



吉田「そうか、好きにしろよ」
「もう俺がどうこう言える立場ではないからな」
摩夜「♪」
吉田「…それに、一つだけ助かる方法はあるしな」
摩夜「は？なにそれ」

吉田「摩夜が俺とイチャラブ関係になれば、それまでの行為はすべてただのバカップルがラブラブセックスしてただけってことになる」
摩夜「ｗｗおじさんさあ、マジで言ってんの？どうしたってある訳ないじゃんｗｗそんなのｗｗｗ」



吉田「やるだけやってやるよ…摩夜!!」

摩夜「お～～～っ!!」

吉田「～～っハァハァ…」

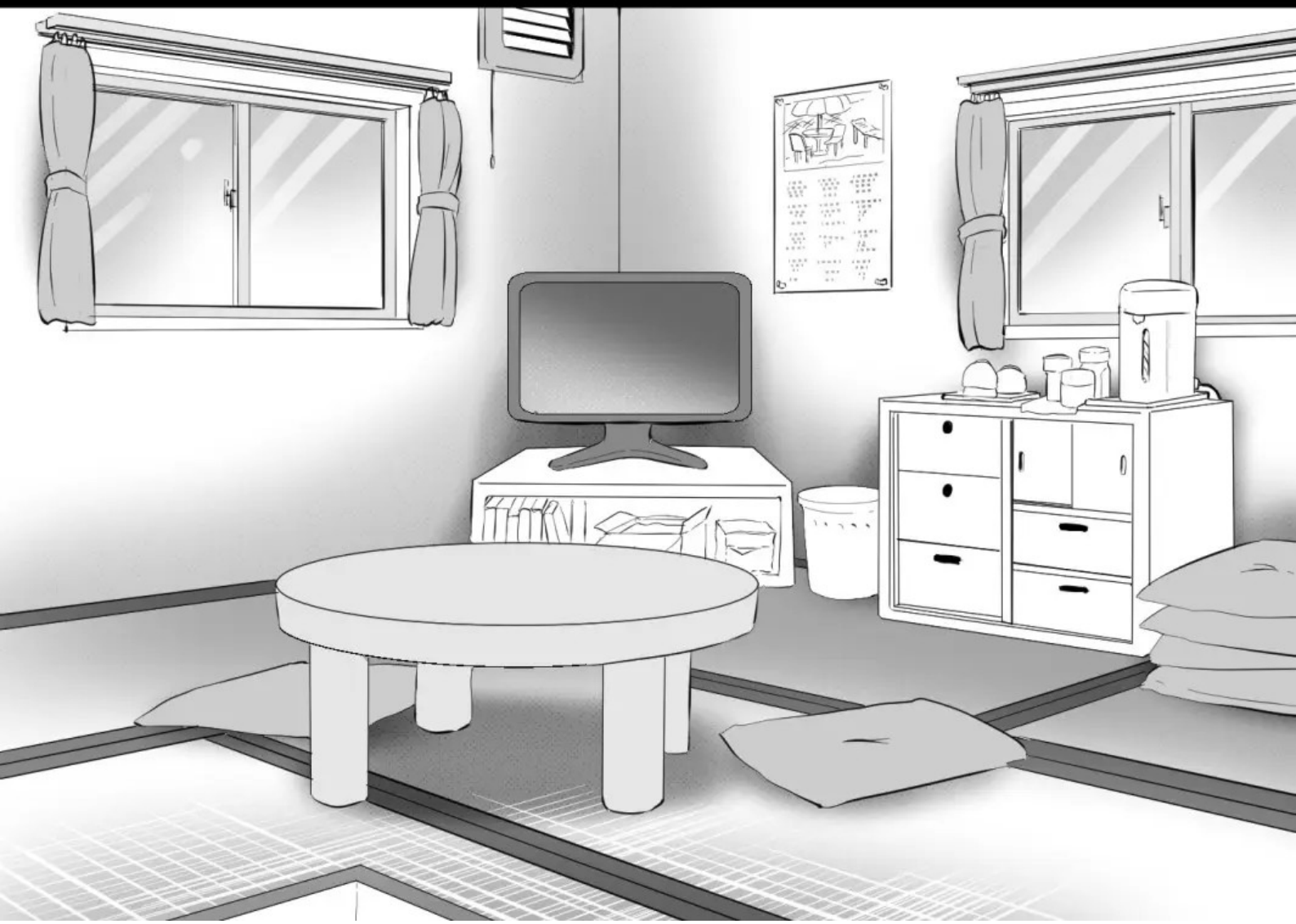
「ゴム、今日中に使い切るからな…!」

摩夜「うわっ怖～い…(笑)」

□週末、金曜日放課後

吉田「吸えっ…！もっと強く…!!」

摩夜「ンんん…っ」

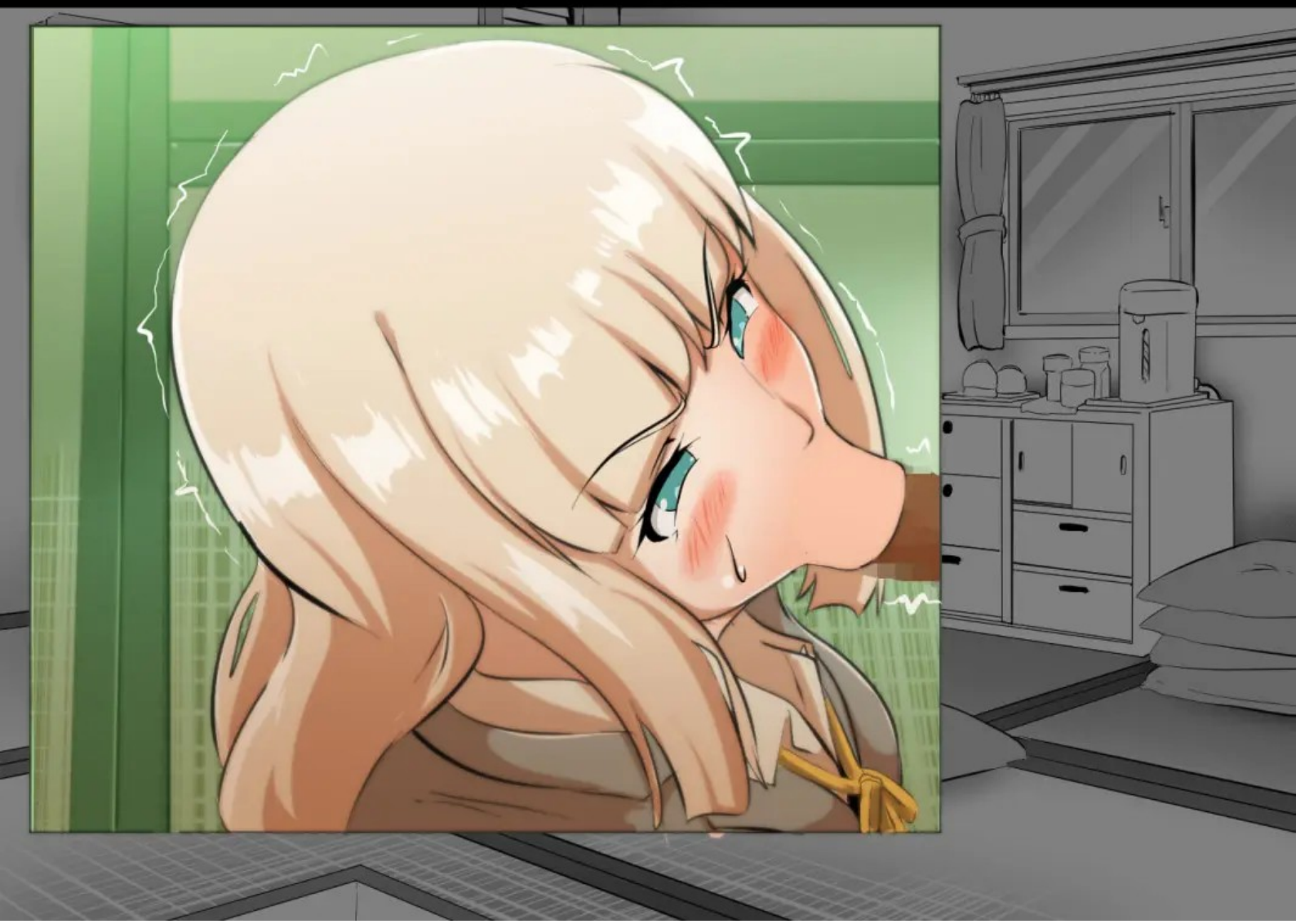


吉田「こっち見ろ！目合わせて…ひょっとこみたいになれ！」

「親の仇みたいに思いっきり吸え！」

摩夜「…んんんん～～～っっっ!!!」

吉田「ほぉ…ぉ……おお!!」



摩夜「～～～っ!!」

吉田「おおお…ぁぁぁ…っ～～!!」



吉田「ハァハァ…ぁあ」

摩夜「ふっふっふ…勝った…♪」

「要求されたことを要求以上にこなしてのオーバーキル♪」

摩夜「まいった？」

吉田「あ、ああ…今日は、完敗だ」



摩夜「♪」

吉田（俺からすれば、可愛い女子生徒がひたすら気持ちいいしゃぶり方してくれたってだけなんだけどな…）



□次の週の土曜日

摩夜「っお…お…！」

吉田「まいったか？摩夜」



摩夜「全っ…然…？」

「なんとも、ないけど…ｗ？」

吉田「まったく…ゴムもそろそろ使い切るぞ？喉も乾いたろ」

「ほら、おっさんのキモキモ唾液で水分補給しろ」

摩夜「んんん～～っ…」



吉田「どうだ？いい加減に…」

摩夜「はぁはぁ…ヤダｗおじさん唾液別に飲めないこともないんですけど(笑)」

「喉はマジで乾いてるし、ほらっ？もっと飲ませてよ…ｗ」

吉田「…わざと滾らせるようなこと言いやがって…！」

摩夜「フルパワーのおじさんを真っ向から受けて返り討ちにしてやるから…♪」



吉田「このっ…！エロ小娘が!!お前とのセックスなんか一日中だってやり続けられるんだよ!!自分のエロさを自覚しろバカ女が!!」

摩夜「～～～っ!!」



＝＝＝

摩夜「～～～っ(笑)」

クラス女子A「～～～ｗｗ」

クラス女子B「ｗｗ♪」



冬馬「…」

摩夜が用務員と初めて接触してから半月ほどが経っていた。

もうクラス女子も用務員のことなど忘れかけ、別の話題に夢中になっていた。

相変わらずグループの中心にいる摩夜自身も用務員とあったことを自発的に喋ったりはしていない。

…俺にも何も相談などしてこない。



ただ、放課後になるとクラス女子からの遊びの誘いをササっと断り、教室をすり抜けるように出ていく。

…旧校舎に向かう。



その日は昼から土砂降りで放課後になっても雨は続いていた。

曇天でまだ日が暮れる時間帯でもないのに薄暗かった。

なんとなく気分の落ちるような天候で生徒も皆、しずしずと所属している各部室に向かったりさっさと下校していた。





「～～～っ!!」
「～～～っｗｗ!!」

宿直室の窓に張り付くように密着し、二人は行為に及んでいた。



冬馬（…な、んで……）

二人とも当然のように裸でいる。

強めの雨に曇天の薄暗い天候で、ガラス越しの室内の様子などほぼ見えない。

室内からも外の様子はあまり見えていないのだろう。

ただでさえ校内に残っている生徒も少なく、わざわざこんな場所に来る者などいないかもしれない。

だからといっても窓に向かって全裸でいるのはタガが外れている。



何より奇妙だったのが、二人のその行為が用務員の一方的ではない。

というより、逆に摩夜が用務員をこねくり回していた。

摩夜「まいった?まいったぁ～ｗｗ?」

吉田「ま、摩夜!イったばっかだから…!流石にキツい…ｗ!おお…!?」

摩夜「まいったって言うまでやめませ～んｗｗ」

吉田「まいった!まいったから!!」

摩夜「ｗｗｗ聞こえませーん(笑)」

吉田「だ、誰か助けてくれ～ｗ変態女に襲われてまーす(笑)!」

摩夜「(笑)」



摩夜が用務員の股間のソレを握りしめ、ゴシゴシと遠慮なく動かしている。

用務員が言ったことから察するに今それをされるのはもどかしいのか、苦しくも若干嬉しそうに拒んでいる。

なにがどうなって、こんな状態になったのか。

二週間、こんな関係が続いていたのだろうか。

吉田「っ！またイく…！いくっ…!!」

摩夜「イけ♪イけ♪連続射精しろ(笑)」

吉田「～～～っ!!」

摩夜「♪」



発射された白濁色の粘液はそのまま目の前の窓ガラスに直撃した。
べったりと張り付き、重力で少しずつ垂れていく。
連続…ということは短いスパンで前の射精が行われたのだろうが、
それにしては量や濃さも異常に見えた。

…比較対象が自分、の場合だが。



摩夜「はい、今日は私の勝ち～♪おじさんの情けな～い敗北射精面白かったよ～(笑)」

吉田「クソっ…明日、覚えておくんだぞ…」

摩夜「はーいw楽しみにしてま～す(笑)」

当たり前のように明日も行為に及ぶことを決めている。

冬馬「…」

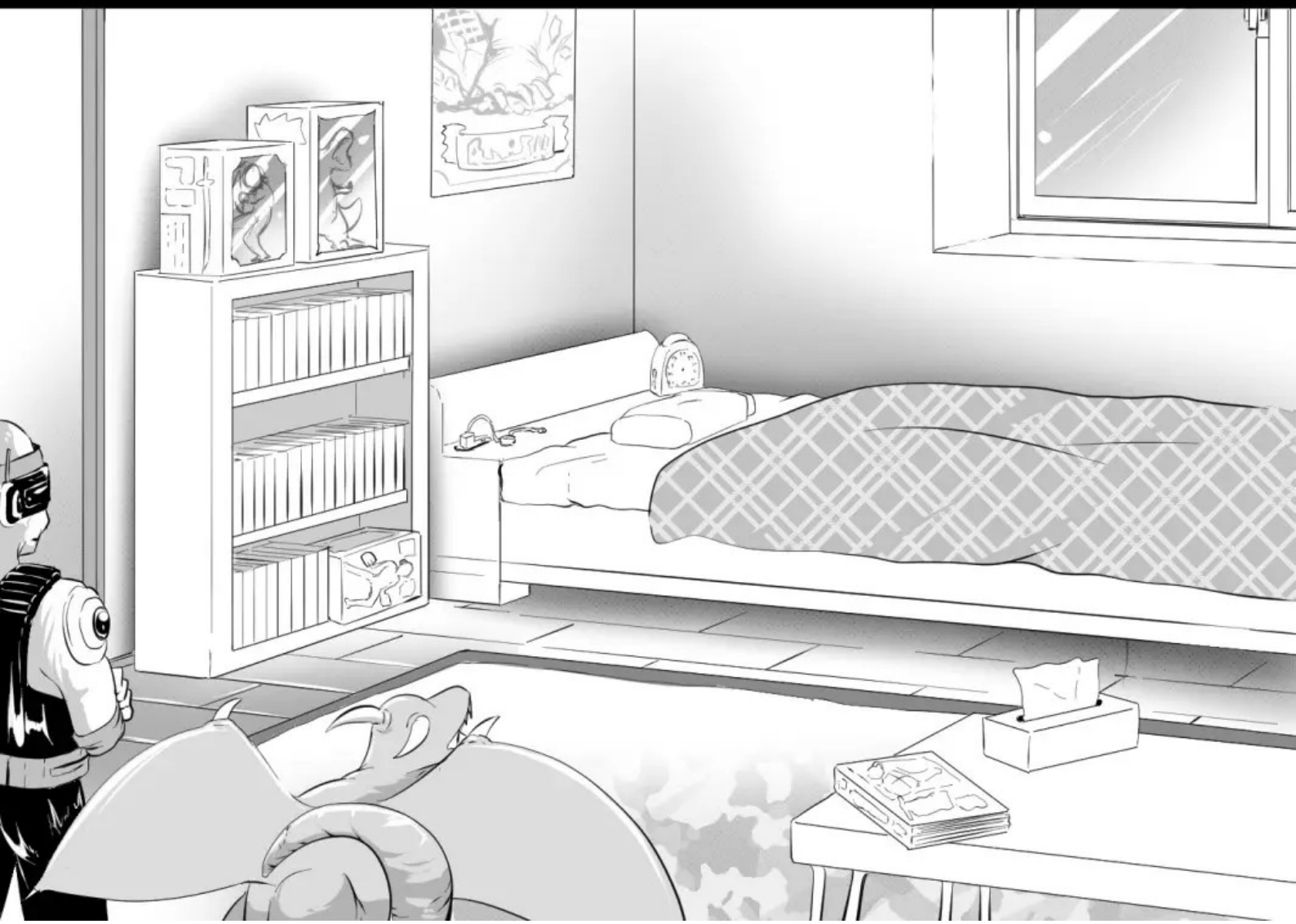
＝＝＝

□冬馬の自室

冬馬「…」

先ほどまでの場面が目に焼き付いている。

自分はその二人の行為をしばらく見た後、ゆっくりその場を離れ、いつの間にか家に帰っていた。



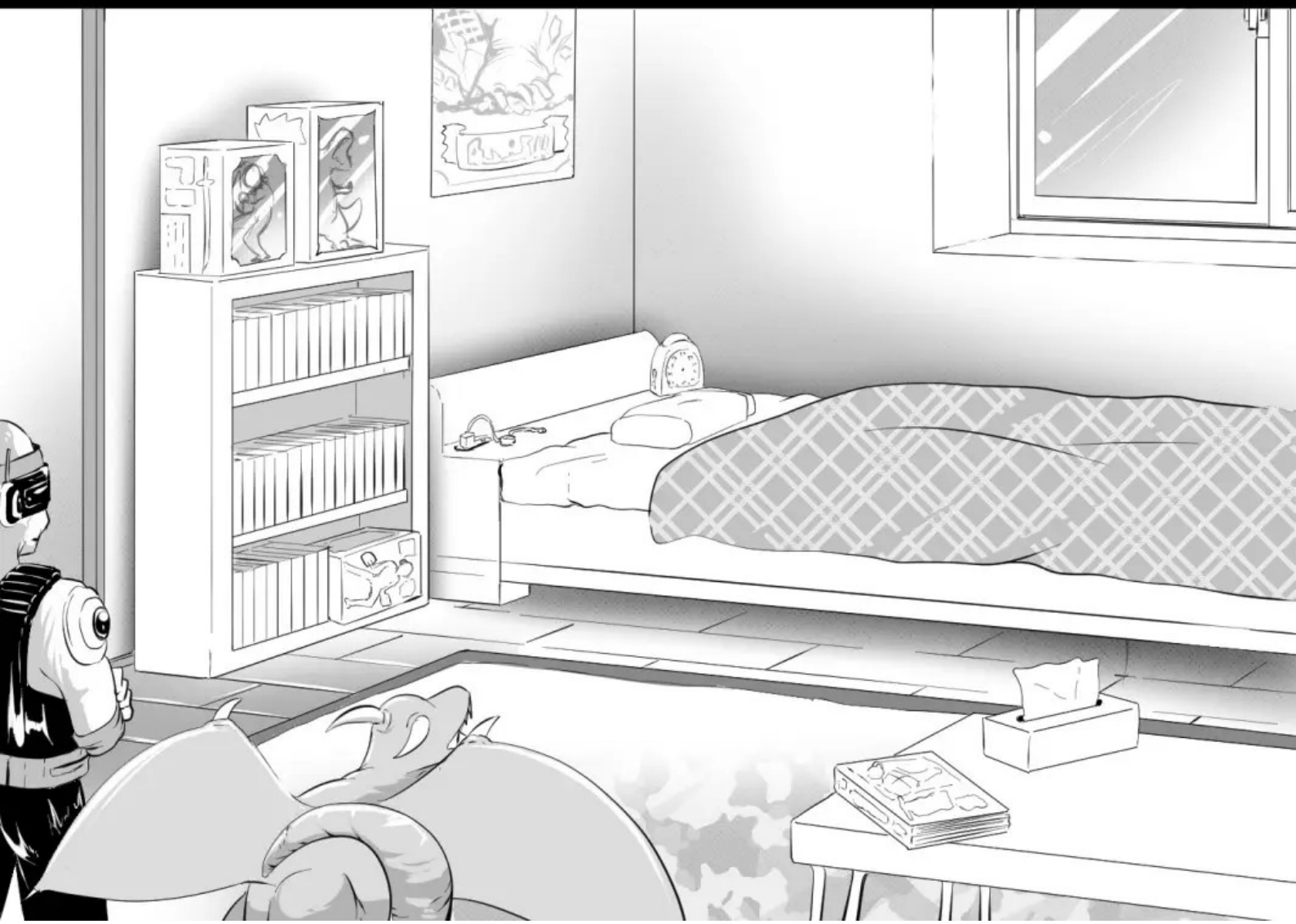
ベッドに寝転がる。
天井をボーっと眺めている。

冬馬「…」

『♪～』

冬馬「…ん」

スマホが鳴った。SNSの着信音だ。
うつろな意識のままスマホを手に取る。



【摩夜】

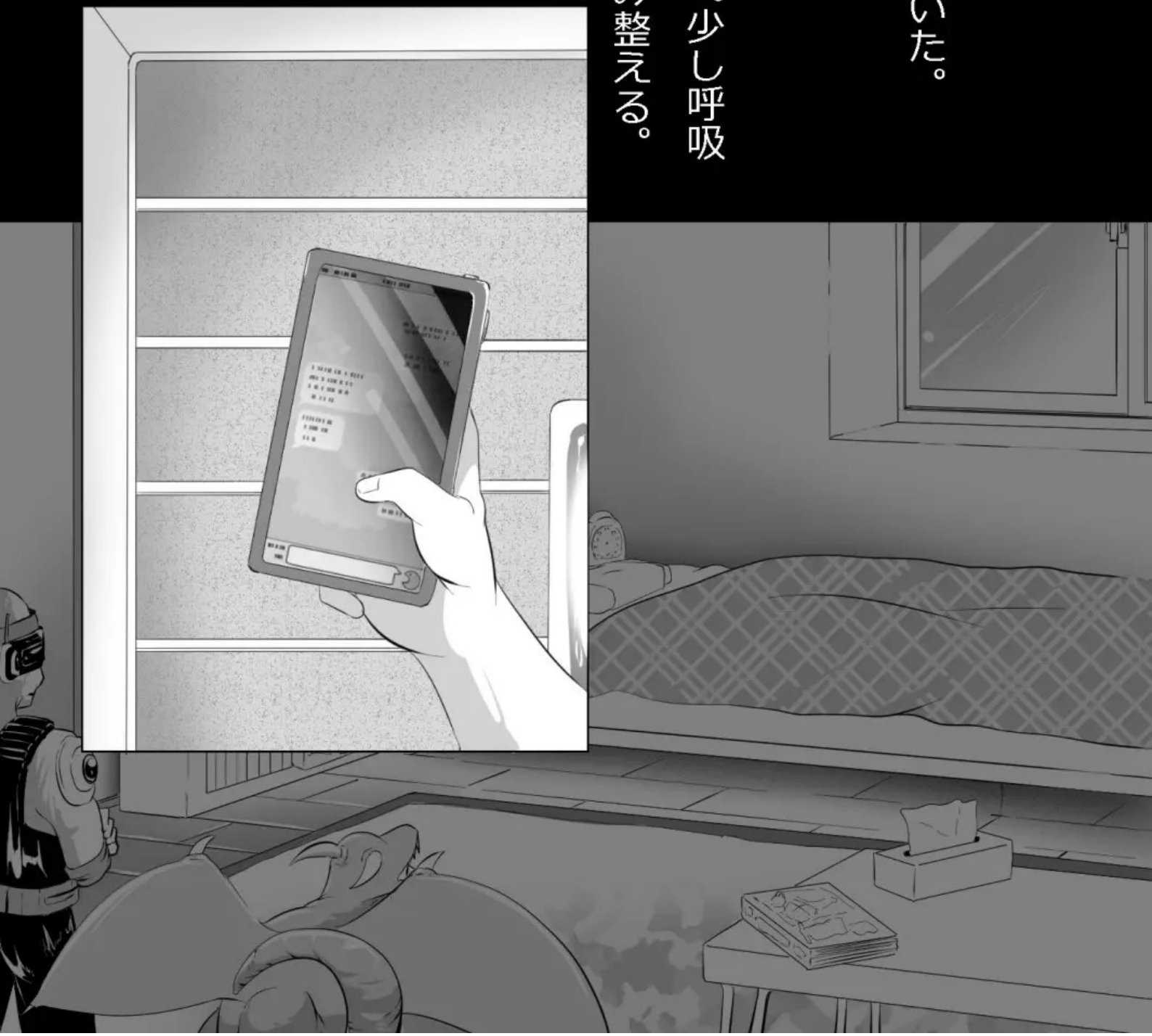
幼馴染の名前が表記されていた。

冬馬「っ」

心臓がドキンと強く打った。少し呼吸が乱れたが、深く息を吸い込み整える。

『あのさ』

冬馬「…」



『そろそろ付き合わんか私らー（笑）』

冬馬「……」







＝＝＝

俺には幼馴染がいる。

家も隣同士で小さいころからずっと一緒だった女の子、倉原摩夜（くらはらまや）。

当たり前のように地元の同じ学校に進学し、当たり前のように毎朝一緒に登校する。



摩夜「おはー」

冬馬「おーっす…」

摩夜「…」

冬馬「…」

摩夜「もう一か月たったねー」

冬馬「別に特別なんか変わったって程でもないな」

摩夜「…ホントに？」



冬馬「…正直、こうやって当然のように一緒に登校することさえ、嬉しく感じてる」

摩夜「正直でよろしい(笑)」

冬馬「こんな朝っぱらから俺だけ浮ついてるってか、妙に滾ってるみたいで摩夜には笑われるかもしれないけど」

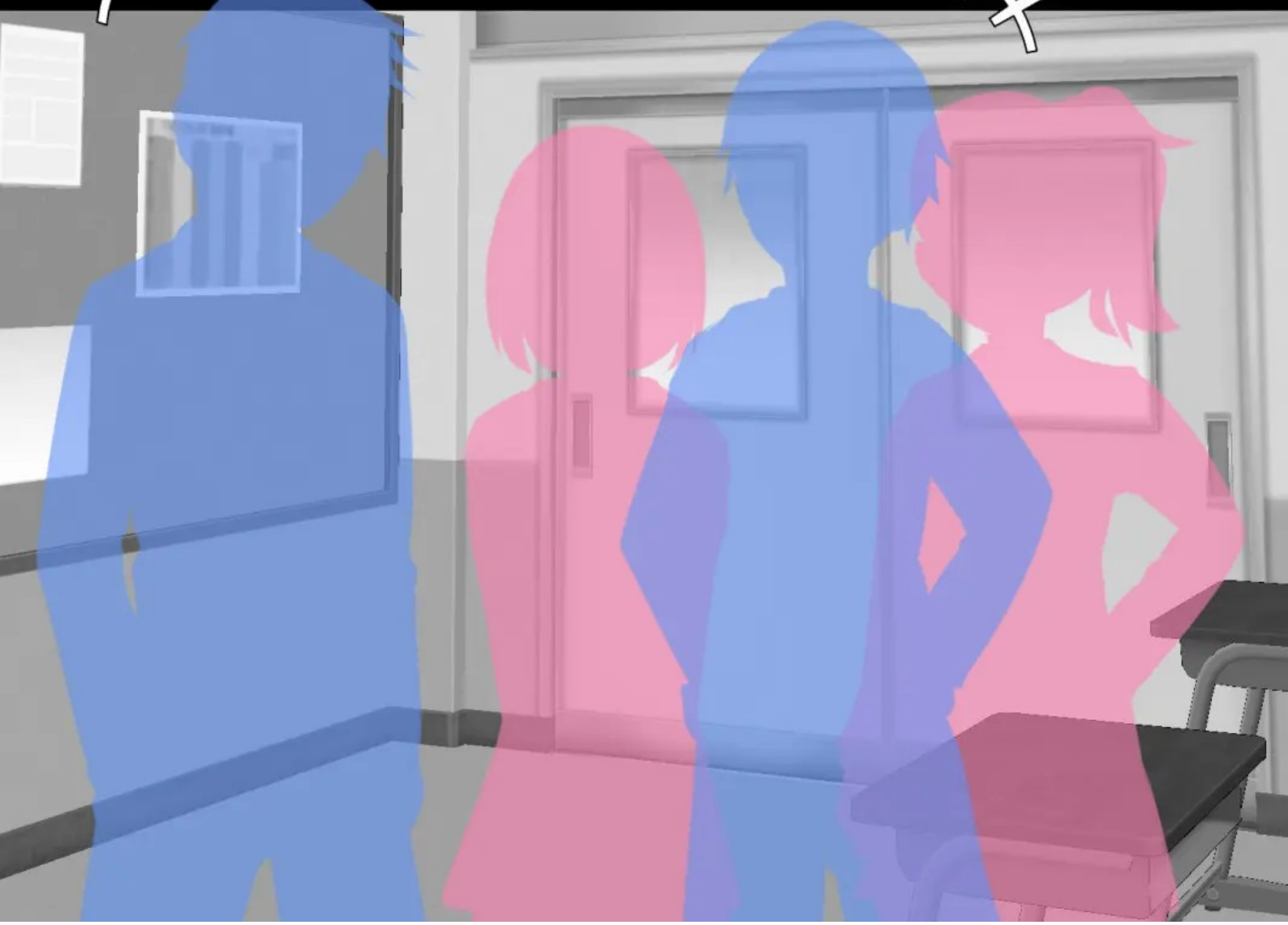
摩夜「え～？私そんなことでからかったりしないよぉ」

冬馬「…」

摩夜「(笑)」

「…まあ、私も同じ気持ちだしさ…♪」

男子A「あー、ついにか」
男子B「くっそマジで羨ましいわ！摩夜ちゃんとか学年でもトップクラス女子じゃん」
「幼馴染ってだけでテメェｗｗｗ」
冬馬「ちょ…ｗ」
女子A「いやいや実は摩夜だって喋ってると、事あるごとに冬馬くん冬馬くんって言ってたよ」
女子B「遅かれ早かれ付き合ってたね」



摩夜が想いを伝えてくれたSNSのやり取りからひと月が経っていた。
初めこそ茶化し気味だったが、幼馴染の俺だから分かった。
摩夜なりの照れ隠しだ。
本当に俺に想いを伝えてくれている。

【 ごめん 】

【 俺の方から言わなきゃ
いけないことだったのに 】

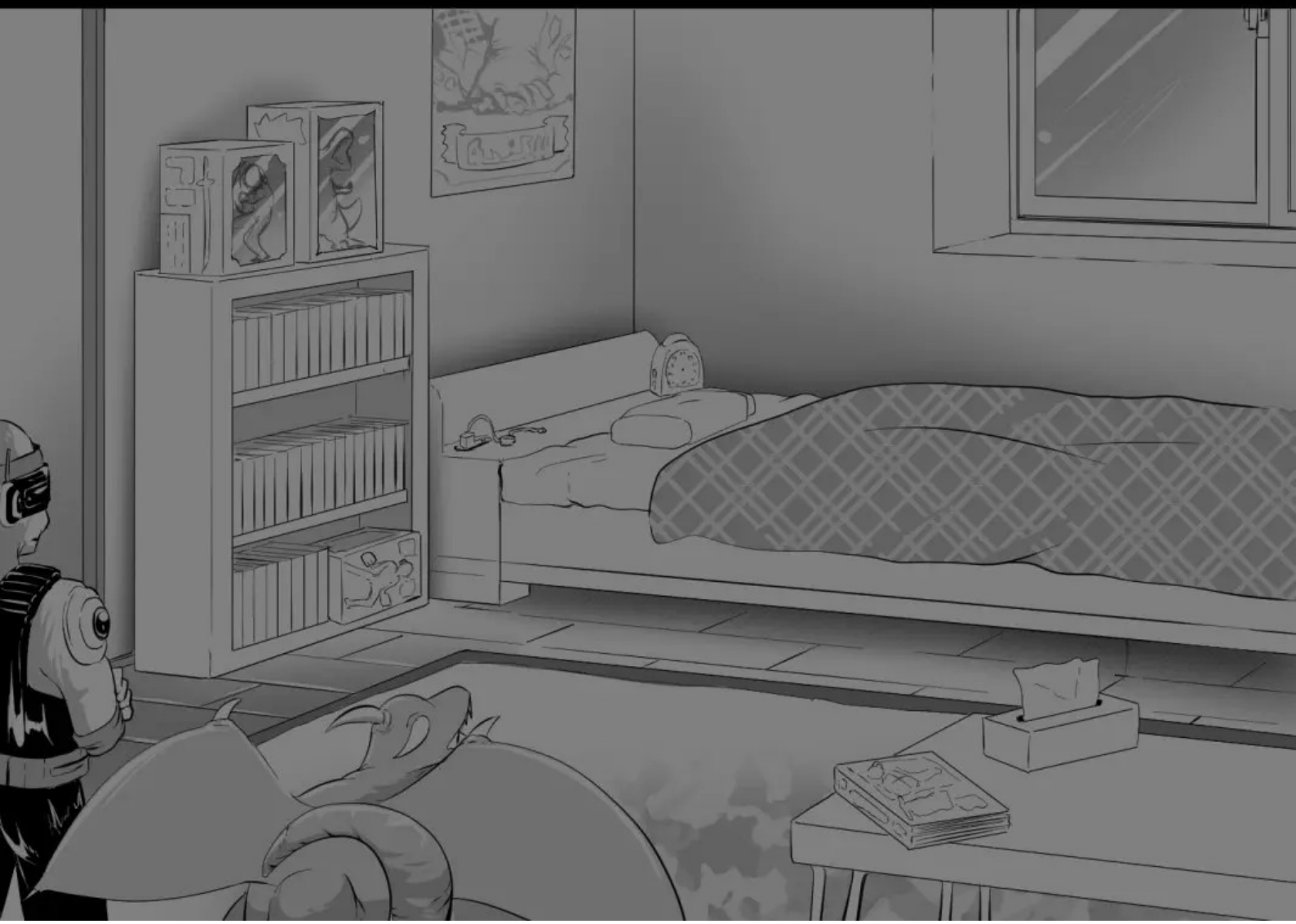
【 でもこれだけは
どうしても言いたい 】



【俺の方が
もっともっと
摩夜のこと好きだ】

次の日の朝はいつも通りの場所で待ち合わせた。

目を合わせてどちらからということもなく自然と「おはよう」と言った。



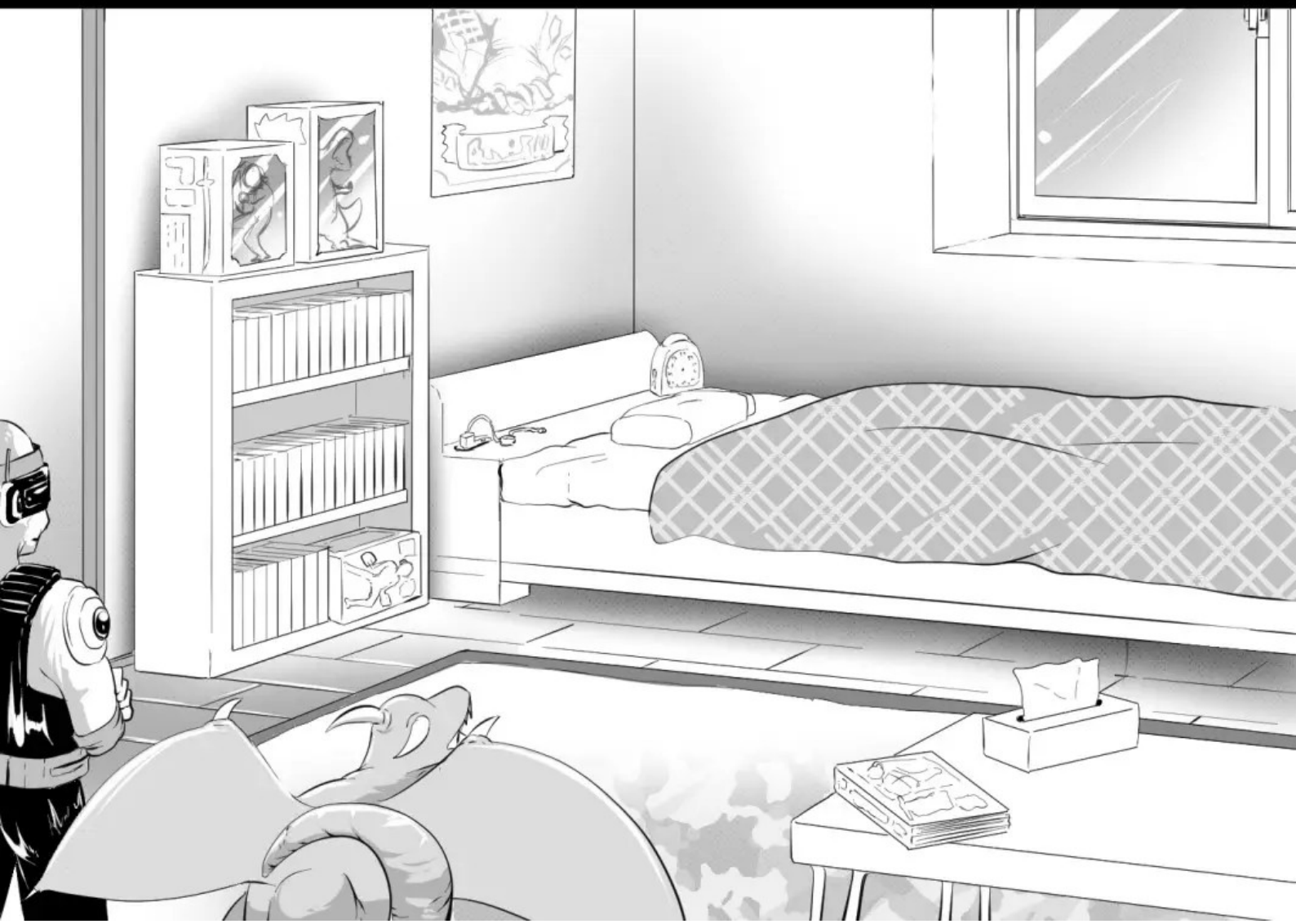
冬馬「…」

……。

用務員とのことは結局聞かずじまいになった。

クラス女子の間でもそんな話題は完全に過ぎ去っている。

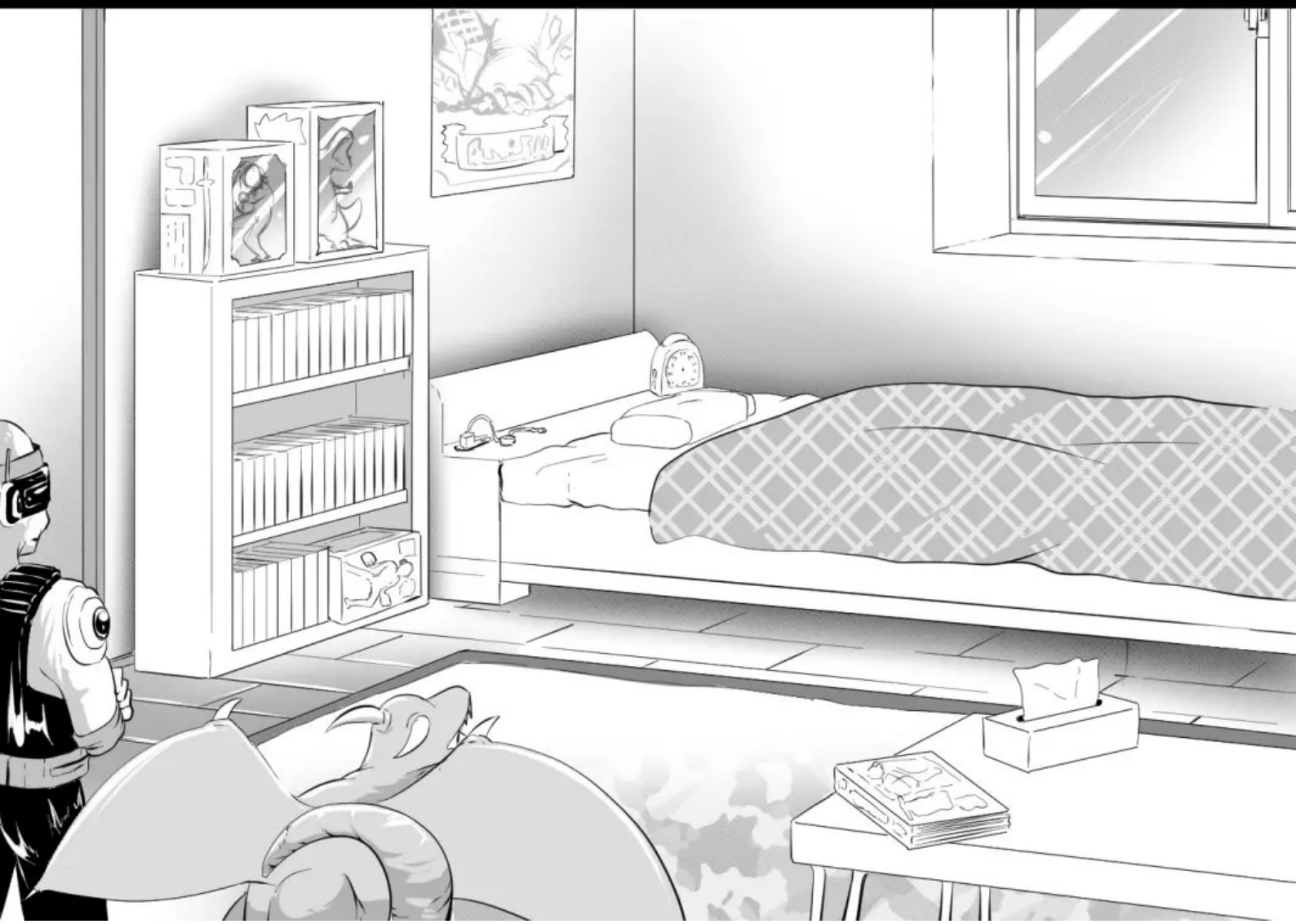
摩夜自身も俺にそのことを伝えることはなかった。



…摩夜が、用務員とああいった関係になっていたのは事実だ。
どんな過程があったのか。無理強いでもなく摩夜の意思で行為に及んでいた。
気まぐれ美人の一時的な過ちだったのか。

摩夜の真意は分からない。
いや、もう分からなくてもいい。

摩夜は俺の幼馴染であり…彼女だ。
今までずっと摩夜の隣にいたのは自分だと自信を持って言える。
そしてこれからも。



もう摩夜にはあんなこと絶対にさせない。
俺がずっとついててやるから…。

【冬馬愛してるぞー♡】

【はいはい俺も】

【なに流してんのwめっちゃ嬉しいくせにwww】

【めっちゃ嬉しいが】

【(笑)】



【てかセックスする？】

【え】

【露骨にキョドるなｗ
したいならゴム用意しとけー(笑)
なんて♪】

【…】

冬馬「…」

自室のベッドに寝転がっている。
何と返信したらいいのか思いとどまる。

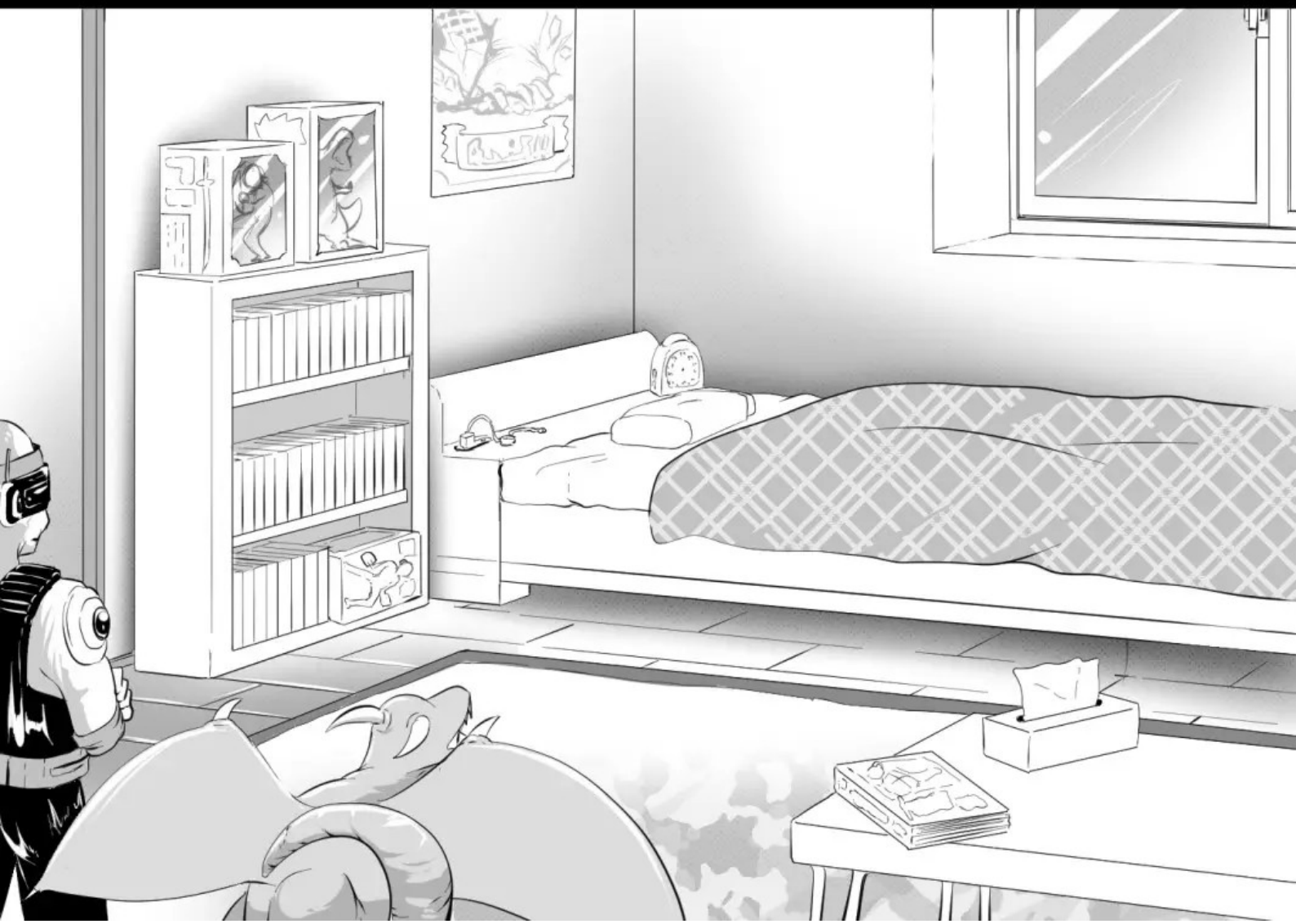


そういったことをやりたいかどうかで悩んでいるわけではない。

…いや、やりたいと言われたら…年頃男子としてはもちろん…。

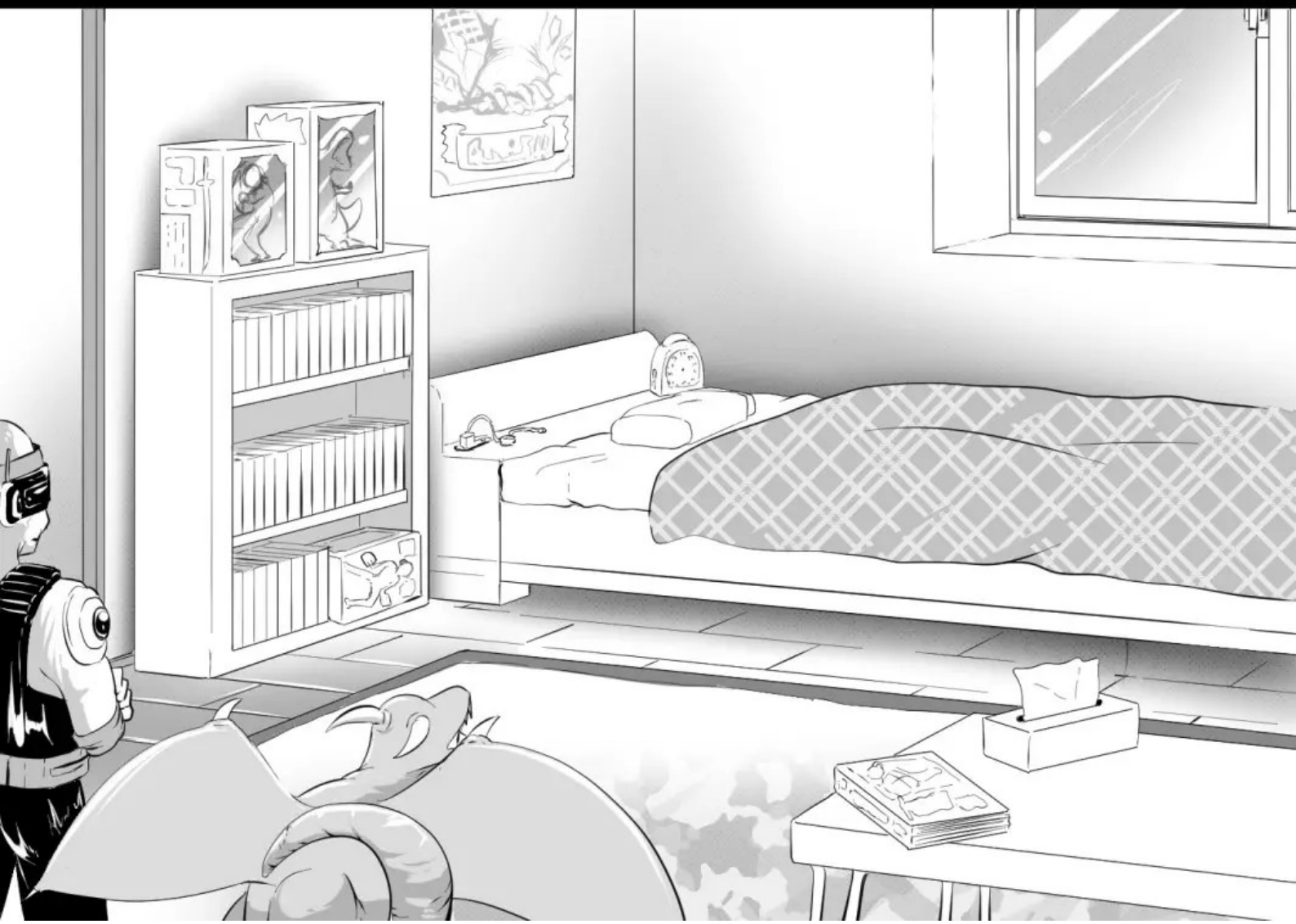
ただ、それ以上に心地よかった。

こうやって今までと何ら変わりないやり取りをしているだけなのに胸はじんわり暖かかった。



冬馬「摩夜…」

俺は天井に向けて一言呟いた。



吉田「摩夜、舌止まってるぞ」

摩夜「はいはい」



吉田「ああ～…幼馴染彼氏とやり取りさせながらケツ穴舐めさせるの最高だ」

摩夜「どういうプレイなの…」

吉田「とは言いつつも何だかんだやってくれるもんな摩夜は」

摩夜「うざ」

吉田「本当は通話の方が滾るんだが…次の楽しみにとっておくか」

摩夜「何か勝手に次回が決められちゃってんだけど…ｗ」



吉田「それにしても、さっさとくっついてよかったろ？」

摩夜「…まあ」

吉田「幼馴染の男子なんかいたとはな」

摩夜「…自分で言うのもなんだけど、多分そのうち付き合ってはいたと思う」

「でも、近すぎてタイミングが中々掴めなかったからきっかけくれたのは感謝してるけど」

吉田「よしよし」



摩夜「…で何でこの関係は続けたままなの？」

吉田「むしろお前に聞きたい。なんで今でも俺とこうして会ってるんだ？」

摩夜「…まだ終わってないし、おじさんとの勝負」

「おじさんこそ何でわざわざ冬馬と私をくっつけたのかなぁ？」

吉田「…知りたいか？ならとりあえずあと三分なめなめしろ」

摩夜「うざ、…ったく」



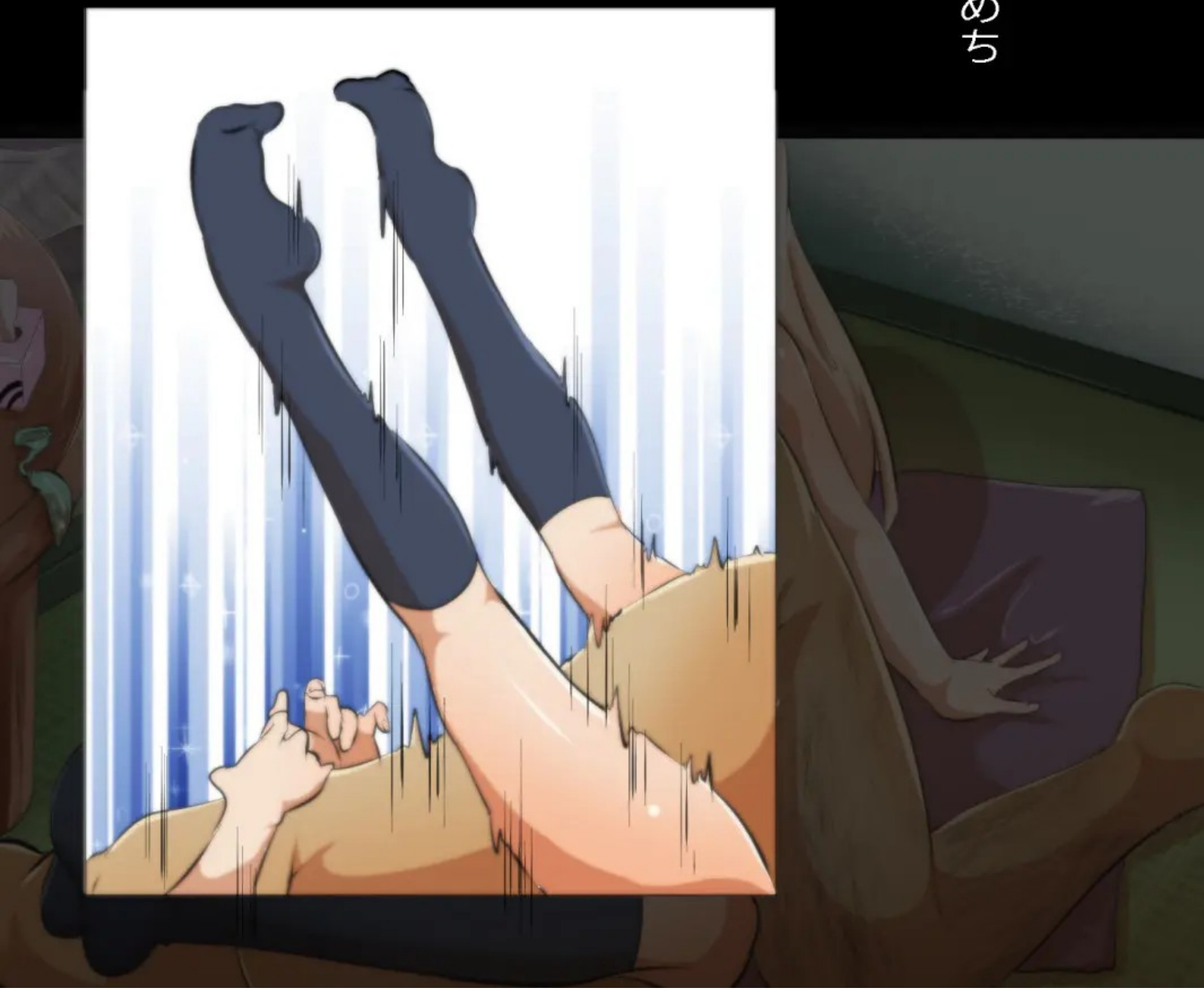
吉田「フッ！フッ、フッ…!!」

摩夜「ねー…何フツーにセックス始めちゃってんの」

吉田「ん？目の前にエロい女がいたから」

摩夜「あっそ、で？私と冬馬をつき合わせた理由は？」

吉田「それはだな…」



吉田「…摩夜が、幼馴染より俺を選んでくれる最高のシチュエーションで堕としたいからだ！」

摩夜「うわぁ、やば…wてかそんなことだろうと思ってたし…wwおじさん極悪最低過ぎる…(笑)」



吉田「分かってた上で付き合ったお前はどうなんだ～？」

摩夜「ぜ～ったいおじさんのモノになんかならないって自信もって言えるもーんw幼馴染の絆が負けるわけありませーん♪」

「間抜けなおじさんを最高のシチュエーションでやっつけてやるから(笑)」

吉田「幼馴染よりキモオヤジを選ぶ変態女にしっかり育ててやる♪」



吉田「そして、摩夜と結婚する♡」

摩夜「ｗｗするわけないじゃんｗ
キモキモおじさんとなんか…ｗ」

吉田「いいや！絶対にする♡俺が責任もって結婚してやるから安心して変態女になれ摩夜♡」

摩夜「してやるって何よ♡してくださいでしょ♡？」

吉田「結婚してください♡」

摩夜「やだ♡」



吉田「俺と結婚しろ変態女♡!!摩夜ぁ♡!!」

摩夜「絶対いやで～す♡♡♡」

吉田「お前は俺の女だ！俺の女になる運命なんだ!!摩夜♡摩夜♡摩夜♡摩夜ぁ♡!!」

摩夜「～～～っ♡!!」



摩夜（冬馬、私との十数年来の幼馴染の絆がこんなキモおじさんのエロパワーなんかに負けるわけないよね♪）

（冬馬たすけて～♪キモおじさんから私を連れ戻してぇ♪）



（早くしないと私……♡）

（…♡♡♡）



——おしまい——

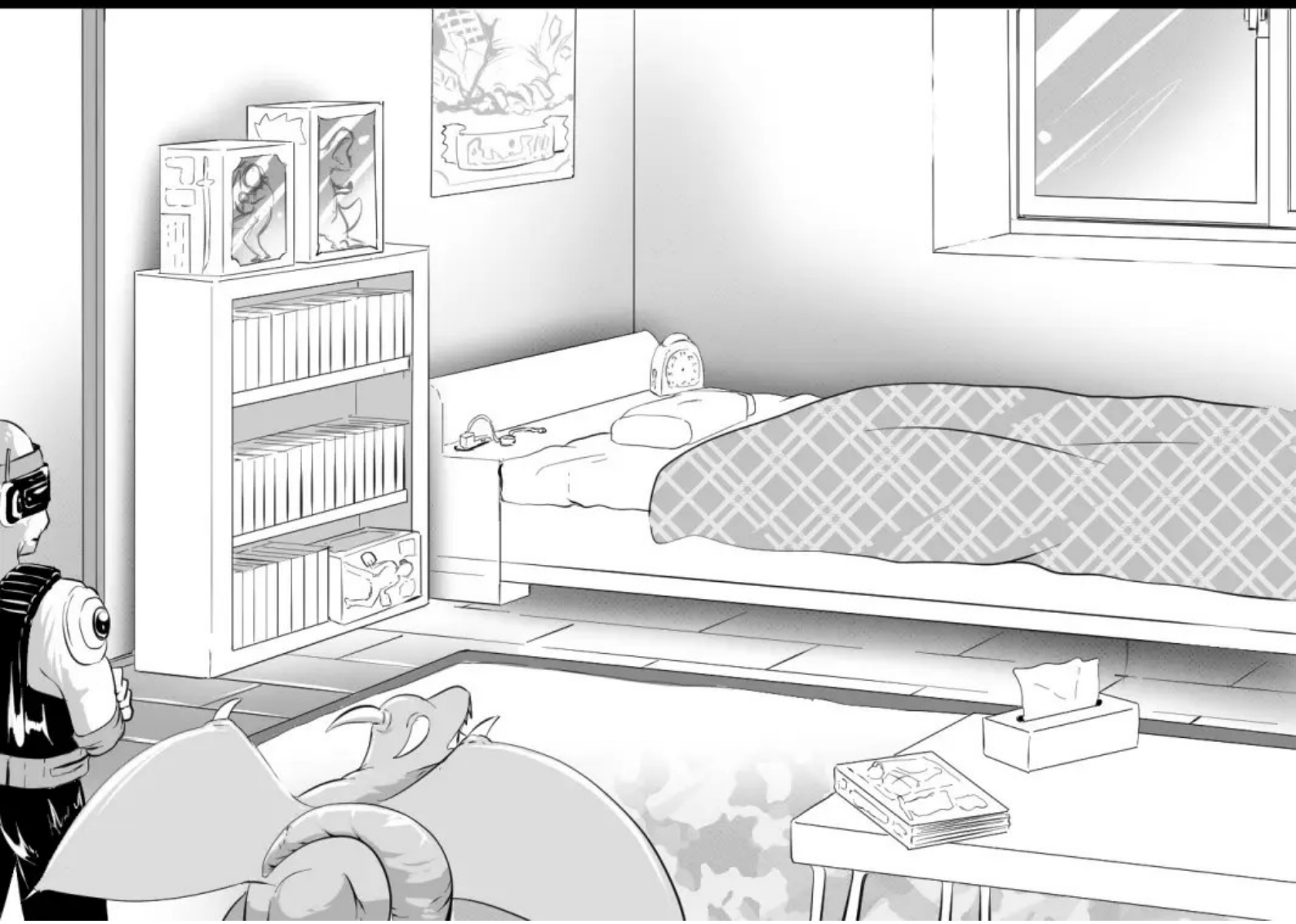


おまけ

「はぁはぁ…」

冬馬「摩夜、平気か」

摩夜「うん、大丈夫…続けていいよ」



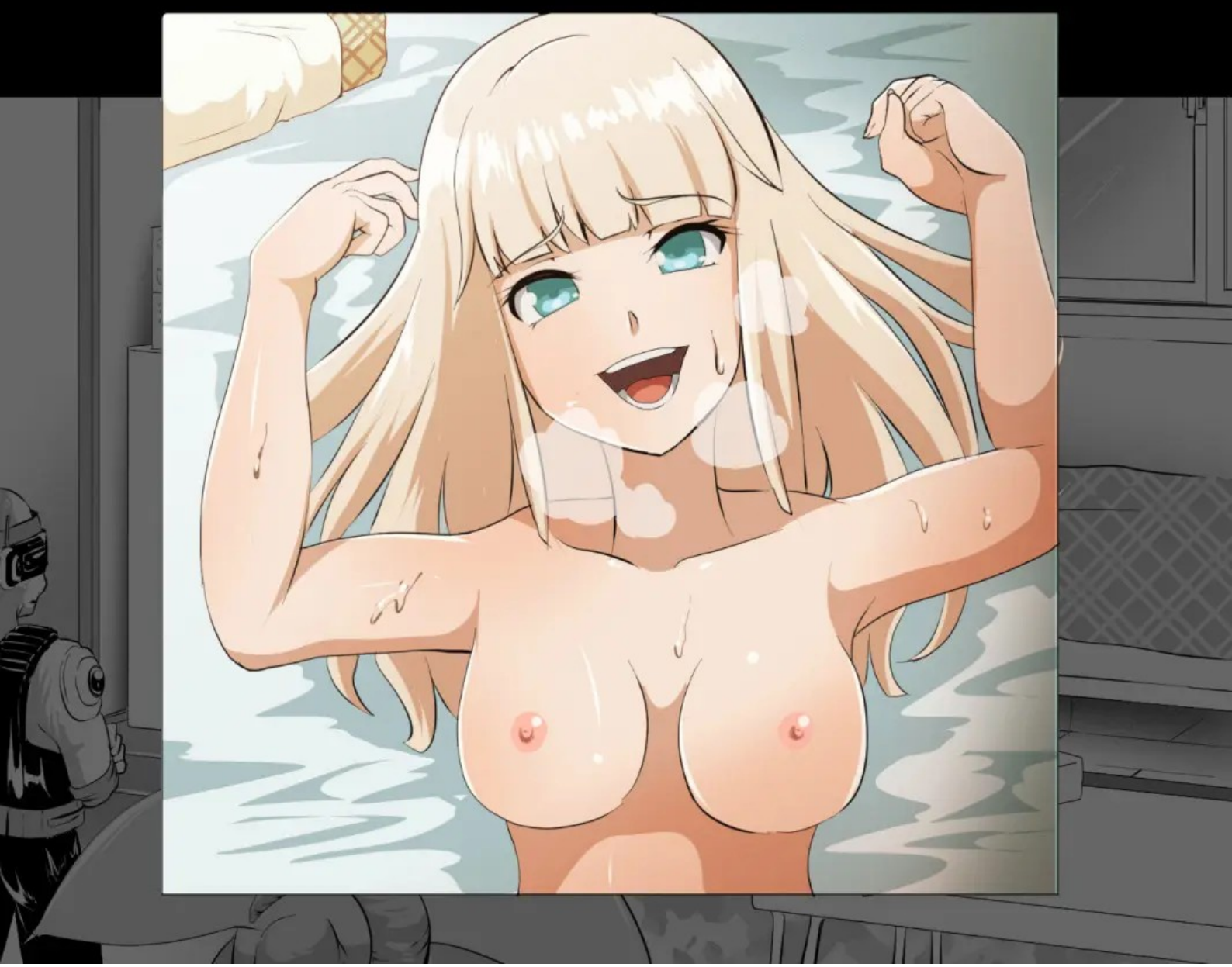
冬馬「…」

摩夜「…？」

冬馬「……その、摩夜」

摩夜「ん、なに？」

冬馬「…いや、何でもない…動くよ」



摩夜「ふふっ…♪どうしたの…んっ!!」

冬馬「摩夜っ…！摩夜っ…摩夜ぁ!!」

摩夜「あっあっ……いいよ冬馬、もっと動いても…！」

冬馬「～～～っ!!」

摩夜「～～～っ!!」



冬馬（俺が…摩夜の幼馴染で恋人なんだ…塗り替えてやる、全部俺が上書きしてやるんだ…！）

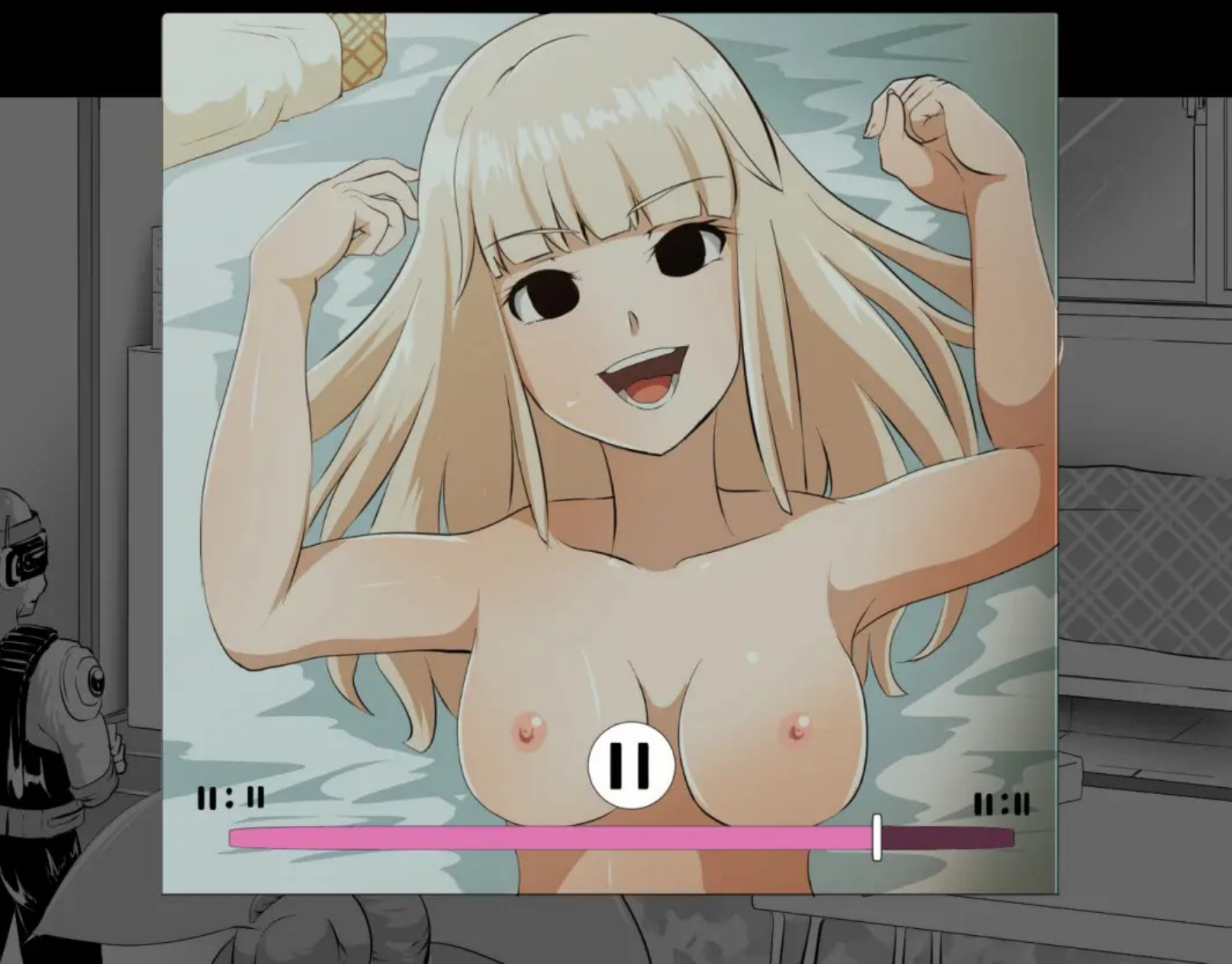
摩夜「あ…っん…♪ぁん♪冬馬っ！好き！好きぃ!!冬馬愛してるぅ♪」

冬馬「摩夜！摩夜!!好きだ摩夜!!」



冬馬『摩夜ぁ!!』

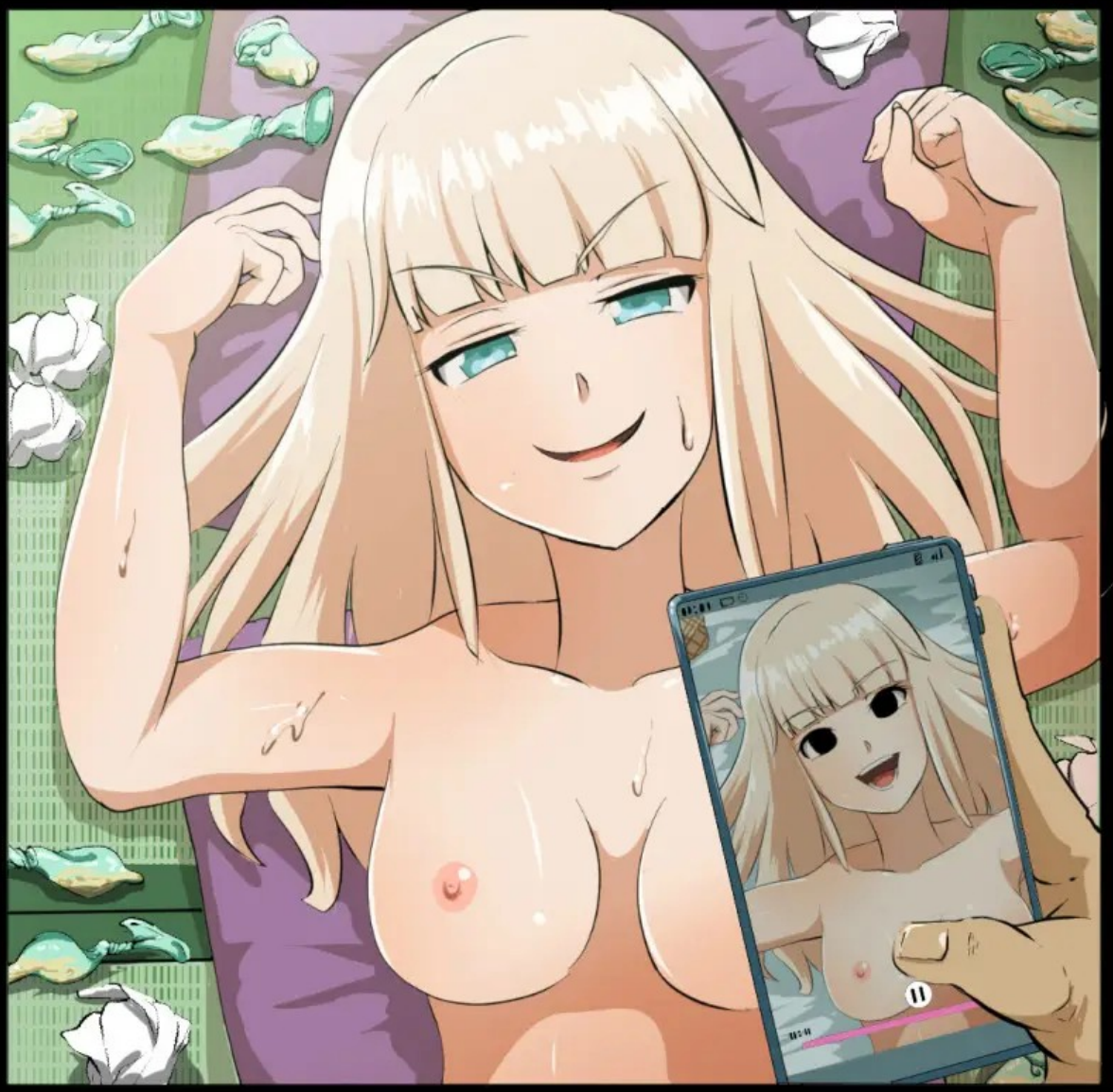
摩夜『あん、あん、冬馬ーきもちいー、冬馬あいしてるー』



吉田「これが幼馴染とヤってる時の摩夜か」

摩夜「撮ってこいとか、意味分かんないんだけど」

吉田「と言いつつも、しっかり撮ってきてくれる俺の摩夜」

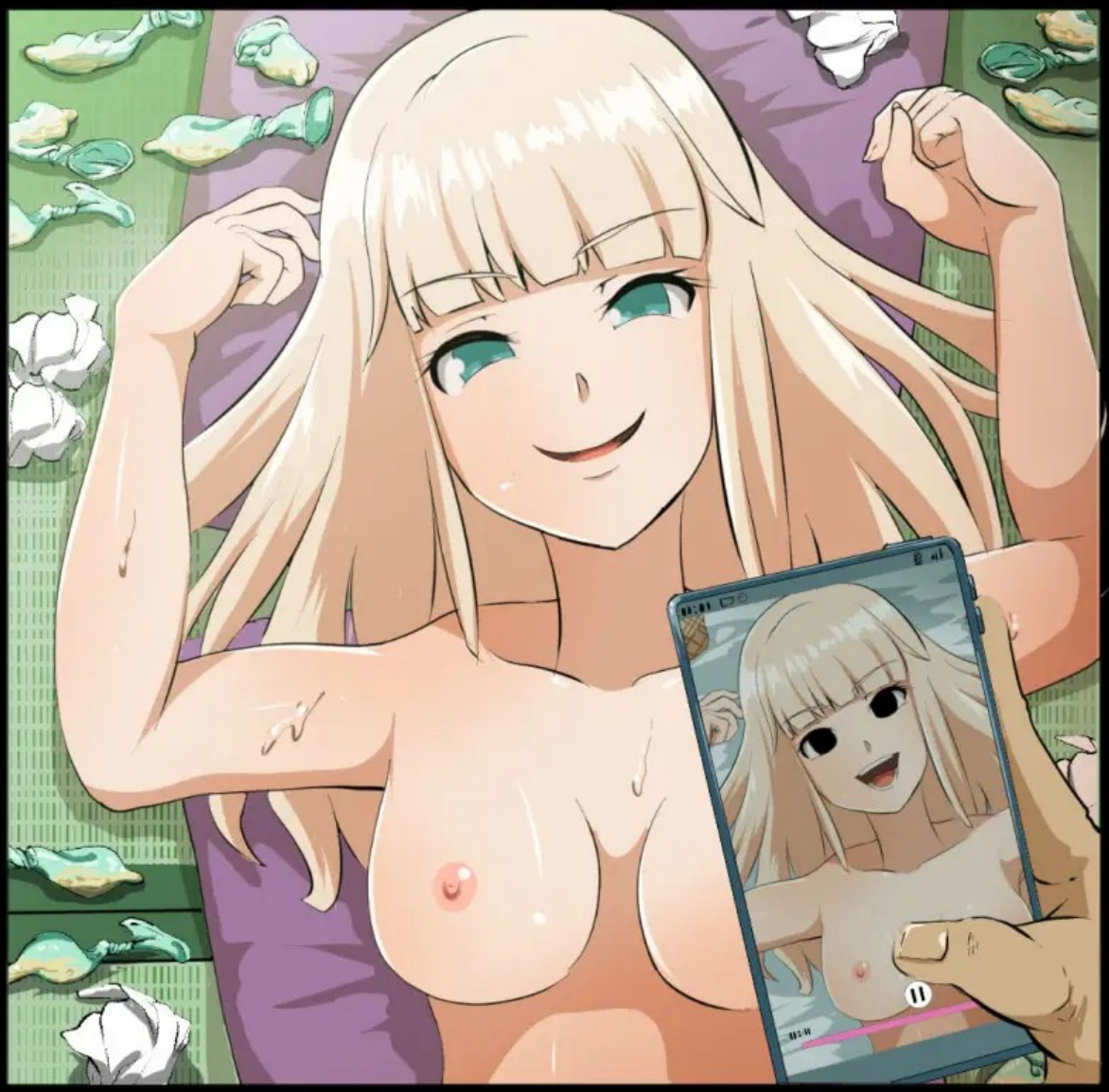


吉田「どうなんだ？幼馴染彼氏との具合は？」

摩夜「どうもなにも、見たまんまですけど？」

「愛する幼馴染彼氏に抱かれて、すっっっごく幸せそうな顔してるじゃん(笑)」

吉田「…そうだな(笑)」



摩夜「…ていうかさぁ」

吉田「ん？」

摩夜「…やっぱいいや」

吉田「なんだ？言えよ」

摩夜「…おじさんってセックス上手い方なの？あと…ちんちんおっきい方な感じ…？」



吉田「…ぷっ」

摩夜「むかっ、笑うなし」

吉田「つまりそれは、俺の方が上手くてちんぽもデカいってことだろ」

「俺とのセックスの方が楽しいってことだ」

摩夜「やっぱ言わなきゃよかった」



吉田「言えっ♪俺とのセックスの方が好きだって♪俺と結婚したいって♡」

摩夜「言わない…♪愛の大きさは冬馬の方が上回ってるもん(笑)」

吉田「愛だって俺の方が上だ♡俺と摩夜の方がラブラブなんだ♡!!」



吉田「摩夜!!愛してる♡愛してる♡愛してる♡愛してる♡!!」

摩夜「～～っ♡！フツーに告ってくんなしぃ～…♡」

吉田「ひねくれ者の摩夜はダイレクトに伝える方が効くもんな～♡？」

摩夜「全然効いてませ～ん♡♡♡」



摩夜「おっ…じさんの愛なんて…一方的なだけですぅ♥」

吉田「俺と結婚したいって言え♥今日中に絶対言わせてやるからな♥絶対にお前と結婚してやるからなぁ♥摩夜ぁ♥♥♥」

摩夜「♥♥♥♥♥」





